木曾路名所圖會

[illegible]

ル 3
3765
5

木曽路名所圖會巻之四

目録

○上諏方神社　勅使殿　五層塔　拝殿　三十九末社　御供所　六角井　鐘楼　神楽殿　釈迦堂　文庫　大福殿　御手洗　大師堂　神宮寺　繪馬舎　御柱　神宮寺　神社圖　護摩堂　大黒天　金堂　宮寺圖

○下諏方神社　春宮　末社　秋宮　護摩堂

須波乃湖

高嶋城　衣ヶ崎　諏方温泉　冨士山眺望

天龍川水源　御射山　保屋の杜　風祝部　和田大嶺

○上和田　大門嶺　○長窪　石荒坂

石割坂　○蘆田　海野平　更級

姨捨山　○望月　望月城趾　大伴神社

城光院　望月御牧　角摩川　瓜生坂

○八幡　八幡宮　経塚　筑摩川　川中嶋　古戦場

○塩灘　駒形社　石馬圖　相生松

分類 ろ
巻号 5(7)
運番

ル 3
3765
5

49-2641

○岩村田
○追分
諏方祠
竈石
熊野権現
横川関隘
○松井田
天神宮 繪馬舎 飯綱宮 巖窟 御湯 金 辨財天 疱瘡神 橋
琵琶窪
貫前神社

住吉祠
北陸道別路
蓼科神社
○軽井澤
信濃上野堺
百合若足跡石
○八幡宮
太神宮 護摩堂 観音堂 中門 随身門 稲荷堂 薬師堂 石階
原一村
八幡宮

かいふが原
浅間嶽
浅間山記
○沓掛
碓日嶺
日本武尊故事 上杉武田戦場 新田氏合戦
刎石坂
円射抜岩
○妙義山
本社 御香水 歓喜天 回廊 石階 大黒天 石階 神馬舎
○安中
若宮八幡

○小田井
塩沢
○坂本
園山坂
本社 末社 波古社 神楽殿 辨財天祠 飯縄不動堂 石階 鳥居 人丸祠 本坊 惣門
○板鼻
烏川

○高崎
佐野長者跡
金鑽社
岡部忠澄跡
○熊谷
久下
○鴻巣
氷川神社 本社 末社
馬場 一鳥居
調神社
萬吉稲荷
王子社
神明社

佐野舟橋
倉賀野 蠶養を営む
上野武蔵堺
普済寺
熊谷寺 蓮生法師墳 什宝
吹上
桶川
女躰社 神楽殿
大宮原
焼米坂
縁切坂
稲荷社
田畑八幡

定家卿宮
○本庄
○深谷
箕田八幡宮
綱古跡
○上尾
山祇社 本地堂
針ヶ谷村
○蕨
○板橋
飛鳥山
根津社

佐野渡世蹟
○新町
岡部原
観音堂
熊谷直實古城
○大宮
氷川王子社 不動堂
金鑽社 神池
○浦和
戸田川
平塚祠
冨士権現
湯島天神社

木曾路名所圖會巻之四目録

妻恋稲荷
聖堂
神田社
日本橋
牛頭天王末社八杉
御吉社
人丸社

夫木
権中納言
俊光
本社

上諏方神社

上諏方(かミのすハ)神宮(じんぐう)寺(じ)

木曾路名所圖會巻之四

上諏方神社 下諏方より三里にあり 延喜式名神大 月次 二座 下諏方より坤の方に當る諏方湖をめぐる

新葉 あらたなる須波の祭のみるめ人志るしを有なれ神のちかひを 宗良親王

祭神 健御名方命

續日本紀 承和九年四月授無位勲八等南方刀美命神従五位下同十月授无位健御名方冨命前八坂刀賣神従五位下

文德實録 嘉祥三年十月授両神並従五位上仁壽元年十月進両大神階加従三位同八月両大神祝預把笏

三代實録 貞観元年正月授正三位勲八等建御名方富命神従二位従三位八坂刀賣命神正三位同二月授両大神正二位従二位同七年七月當郡水田三段為南方刀美神社田同九年三月進両神階加従一位正二位云云

拝殿 南向美麗なり廊のめぐり彫物彩色内陣神社し和州三輪の如し

御供所 拝殿の東

文庫 同所に

祈禱所 同所の側に

繪馬殿 拝殿の西にあり

護摩堂 繪馬殿の西にそれる

三十九間廊下に三十九所の末社あり

所政大明神			
前宮社	砥並社	若御子社	柏手社
楠井社	大歳社	荒玉社	千野河社
溝上社	瀬大社	玉尾社	穂護社
藤島社	内御玉社	鶏冠社	酢藏社

習焼社　御座石　御飯穀　相本社
若宮社　大西御庵　山御庵　御佐久田
闕庵　八劔社　小坂鎮守　鷺宮明神
萩宮明神　達屋明神　酒室明神　下馬明神
御室明神　御賀摩明神　砥並山神　義倉會美酒
神殿中部屋　長廊社　以上一棟廊下之側ニ鎮座ス
大福殿　廊下の入口にあり
御柱　鳥居の内にあり
大黒天社　本社の外にあり其外末社二社
勅使殿　社内東方にあり
六角井　同東の方にあり
神楽殿　六角井よ溝を
御手洗井　勅使殿の傍にあり

金堂　神宮寺の山上にあり本尊釈迦普賢文殊を安ず
五重塔　金堂の傍にあり五智如来を安ず
鐘堂　塔の傍にあり
釈迦堂　石段の下銘云永仁二年とあり
大師堂　釈迦堂の西にあり弘法大師を安ず
神宮寺　真言宗　中興飯田純栄入乃乗眞
当社は科野の国一の宮にして特に上諏方は神領広くして社美麗なり例祭は年中七十五度あり其中に毎年三月酉日三ツあれば中を用ゆ二ツあれば初を用ゆ鹿の頭を七十五組本の世神前に供ふ又別に鹿の肉を料理して社人も其鹿の肉を食ふ他人鹿肉等の獣を食んとする時は此神に祈りて社人より箸を受て食へば穢れもなしとぞ此上下共に七年に一度（毎寅申年）御柱とて大祭あり遠近四方より諸人多く集まる其祭式最古き

より申伝ふ七不思議也といふ事あり所謂 御渡 八栄鈴 御作田 浮島 根入杉 御射山 湯口清濁 等なり御渡とは信濃なる日本なく寒地なりして寒氣強ければ諏方の湖乃上に氷ありて凍りて凡三日差渡れバ第四五日の頃上の諏方より下の諏方まで方ホ横幅五尺ばかりなる本道の通ずるがごとく氷の上にあと付く見ゆる之社例年必あり奇怪の事之これを御渡といふ又神先ともいふ此御渡ありて後人々も御渡すれバ内ち渡りぬ氷落るさなへ年にによりて御渡のなき上の諏方より下なる事はなきは下の諏方の方に御渡ある所もあり之其所なりて年の豊凶を占ふといふ御渡筋一文字に渡れ戒をゆるむ事なり

信濃 下諏方

和田へ山路五里八町 諏方の駅一千軒許もあり商人多し旅舎赤虫女あり屡戯あるしかあれども遊君客として寒烈し

諏方春宮

北の坂の下でけふ湯屋に毎歳正月朔日に遷しなまる

祭神上諏方と同神　御殿　若宮　神楽殿　伊勢両宮　回廊　蘿所　御輿　竈殿

子安社　護摩堂

諏方秋宮

いれも本社のめぐりにあり駅中にあり毎年七月朔日よりふうさし年毎度神楽に奉せ給ふせんえ日より祭礼なし七月朔日より祭礼育法宮よ遷しまゐん附る秋の宮空社なり秋の宮よ遷しあん附る春の宮空社なり

舊事紀

天孫降臨時。大己貴神第二之子。健御名方命。欲拒天孫於是経津主神遣岐神逐之健御名刀命。逃到信濃國諏訪郡迫甚而請曰。願得此郡以為父母之讓不為天神之慾而作吾居則吾堂奉背天孫哉。因茲経津主神以諏訪一郡附于健御名刀命是即諏方明神也

神皇正統記

大物主神子。健御名刀美神者事代主之弟也。今諏方明神是也。一云神功皇后征三韓時。天照大神託以住吉明神。諏方明神令為輔佐

諏方湖
下諏方
神宮寺
高嶋城
冨士谷
成元
八幡
美濟

又云 信濃ノ諏方。下野ノ宇都宮。専ラ狩猟シテ供ス鳥獣ヲ

名ある本下の諏方ハ此街道の駅にして旅舎多く繁昌なり
旅人をとゞむる女たちはじらひせるもせず袖ひき旅行とゞむ
旅行人の足をとゞむ所の中に温泉ありて此宿の女あそびして
浴屋の定めなし浴させる其外よろづの商人多く駅中は旅舎く
須波乃湖　周十一里餘　直三里許　鯉　鮒　亀甲あり今は氷滑りて
いふ人も及ざるなりの雲のは湖面風ひらひてより氷鏡なん
おもし

堀川院後百首
すはの海氷れる橋はまだや染る神の渡りてとなるなり　顕仲

壬二集
冬来てはすはの氷も玉鉾のすゑ渡りはあらそひなし　家隆

拾玉
諏方風戸をさそひくる嵐に波も氷にては社おもしろ　慈鎮

山家集
春をまつすはの渡しも有ぬべしいつをかぎりにうちとけるらん　西行

夫木
すはの海の氷の上の通ひ路は神の渡りて世を渡るらん　為家

雲ゐにもや諏訪の氷は半分て尾となる鵲のわたらむ後　親隆

此湖は冬至の頃より凍はじめて彼七島めぐりは浦々ありて
民家衆し四方にはいくありて風色斜ならず漁父あまた有
て魚鱗をとれども年毎し漁舟の外船は乗ることを禁ずるの
湖水のほとりは寒くして氷を張ること五寸も透間なく湖一面に
ぬかずの年は寒温によりて霜月のうちあるひは臘月初より
氷はりて後人其上を通る事を年によりて正月の末二月半まで
まで氷の上をゆききる氷の厚さ年によりて八九寸一尺餘寸あり其
上に行程の大木大石を置ても破るゝ事なし幾千人ゆきても危
うき氷の上を人のかよふ板の橋をならべ通る其ゆゑ雪積る時は常に道
ごとく見ゆるなりされど馬は切馬もわたる氷の厚さ
日本國中に湖多しといへどもかくのごとく氷ゆる事稀なり信濃の國は
日本にも高くして寒気深き国なる故に此湖氷りて諸人

武田勝頼ハ
我勇威を
自負して
神佛をも敬
赴き給ひし時
忽ち板橋崩れ
評しける

水の下に網を引を水引せりとこ稱ス奇異の業なり水底を所長く
うがちて其所より網を入れ其先なをうがち行り竿を持て糸を穿ち
又はなれよる次のうがちたる所までおくみを送て廣りて幾所もかく乃
おくにうがちて網をおくしもりて魚をとるなりしかれおくく
とる事を知らずして屋をよる漁人をおどろかせしとそ又氷をうがち
漁をなすに腰より長き竿にて挟むをあまりて屋入なしとも竿なく
死をすねがるゆへ此を虚る沈波の人あまた番にて家鶏を入て氷の上を
一りに鶏なく所をさがして屍を得るとぞ

高嶋城

下の諏訪よりも壱里ほとあり諏訪因幡守居城にて三万石なり
縄手町ありて湖中に出る方は湖にて陸の方一方より入口あり其前に
出入自由なりこの城は右左は湖の流れ橋ありて此川より舟の
高嶋の城は橋の下をとふ白山辛勘助晴幸縄張をとのよ
富士山の見ゆる所し

衣裳濟

丈本

須波のうみを添をがみちるがめ澄しを月ごと未あきらかなのを

すへの海衣が浦にて見れは富士のえうく高ねの浮る子

大和大隅氏

諏訪温泉

此は奇一説若桜宮天皇の御製とも又弘法大師ともいふ何れとも不審
されど人に何にあれば些くうらふきとかん
下諏訪駅中に三所あり旅人及び駅中の人こなた平生
入浴なん幸陣の傍よりの中を流て高貴あるひは男女
を那川性未の雜人迄に上に湯を
かし衣のものの流ひあまた流をなしてもある

冨士山眺望

下諏訪の湖邊あるひは上諏訪の湖邊
よりも鉢に見ゆる所経廿五里許あり

雪の冨士水うみに相對を

雛喬

天龍川水源

天の水源の湖の落口天竜川なり是より東海道天龍川
ワてしをまで口日路あり上の諏訪のむかひの山を風風が
ざを守るひ其西の山を守屋が嶽といふ湖の良にあるやさしと
八ヶ岳といふこれ小田井のうへより見ゆる八波の山なり何まも
高山なりもとの湖乃めぐり山小川にうぐひとふ魚多くして
春の比みるにさかのぼりて漁人とるなり岸の口ワどこ水の
口ワ附にのぼりて後にうつるし葦地あそく網にてと持をうる
此地の人ままに赤魚やうにに下れもとに彼岸ざくら糸桜多
し家の園あは花多く幸他より運し芸湯ちかくもまで
彼岸桜も一生八重其外桃梨の数も一度に花ひらきさか

御射山

玉葉

あるグゲてうし紀読に
むなき此坂家れひがしの山をとりよ
射る矢の稿語なり

とよ新たく梗を水めぐりの一むらに志りゝ里行ら婦のみさ山

金刺盛久

しものすわ
下諏方
あきのみや
秋宮
宮柱
逍遥院

毎とし文月廿七日東山狩にいでゝ同廿九日帝の社に
ゆかうを備ふ長官五頭家老のゆり座祝詞ありそれをもて贄
よりて神供猿座の神事とよへり
猿座はもうし諏訪郡御射山神戸の東八ヶ嶽の麓を猿座
といひ又筑摩郡松本のちかく薄水の神あり
左ん所を
猿座社なし

袖中抄 志なのなるはやまは風もそよくにもみえつゝありけれ
顕昭云はやのさとは所よれの國にありその所よりあるすにし
今小県郡塩田に猿座の地名ある也

文永二年九月十三夜野鹿を

続古今 秋ふかみはやまのすその柞原にそよぎ鹿も妻をこふ覧　関白左大臣

夫木抄 いかでかはとはやれをみゝさへのやまさやみさらなさん　読人しらず
縁年名鷹狩るによりて諏方の御射山祭の贄鷹に備へてあらん

東鑑 建暦二年八月記云可禁断鷹狩但於諏方大明神御贄鷹者被免之云云

信太社百首 信濃なるはやの鷹をうちならしきさ御狩鷹の贄をまつる人　宗良親王

風祝部

袋草子 しなのなる木曽路の桜咲にけり風のはふりにすきまあらすな　源俊頼

旧草子云しなの信濃の国はきはめて風早き所なりよて諏方明神の社に風の
祝といふものを置てこれを春は始め深く物に籠めて祝ひて
百日の間尊重するなりしかれば其年風静かにて農業よろし
それをおのづからすきまもあり日の光も見えしぬれば
風納らずとて俊頼の此歌よめるなり

勝頼諏方祭詣應妖孽
去程に法性院大僧正信玄去る天正元癸酉四月十二日逝去ありしく
三年の間は深く此事を隠密して今年天正三年四月十二日七仏
事を執行ありしく諏方の歓園にて此度は仏心を遂
敵に与する者多かりし別して織田浜松の喜ぶ家合許あり勝頼

下諏方
春宮
千首

と攻滅さるゝ企最密なりしが武田の旧臣勝頼を諫め常に其備の意をさ
然ぞ責らるゝに武田の幕下三州山家三方の内作手の城
主奥平美作守貞能其子九八郎信昌去る八月より遠州濱松に
随従して月玉長篠城に楯籠る勝頼此事を大に怒り給ひ急ぎ
出馬ありて長篠城を攻られ侍しが頃く天正三年五月中旬甲斐
の鉄を出馬せしめ玉ふに従ふ人々には武田逍遥軒信連穴山左衛門大夫
入道梅雪一條右衛門大夫信龍武田左馬助信豊武田兵庫助信実
真田源左衛門尉信綱を始として都合其勢一万五千余人とぞ聞えし
抑此諏方大明神に参詣ありて後より吏に進發し侍べしとて
かの社に馬を向けて往ける既に鳥居の前にて見給ふに附佐云より御侍
に亀甲の持筏梅檀喜の下より折るゝ事を不測るれ其から高遠
へ退給ひける時板橋にて馬より落下し給ひしかば是に堅固に身退し
橋本より中程より遠に落て舎人をはじめ小人衆三人ともに死ぬとぞ
御馬逸物といひ殊に勝頼馬上の達者なりしが鐙を踏て飛越さ
せ玉ふより御身に恙もなかりけるに依て今度の合戦いまだあらんと
雑人ども私語けるを理とし深く見るべし　武田三代記にあり

和田大嶺

下の諏方社立てく落合橋ありて両谷とも諏方山といふに和田
義盛の嫡孫ありて芦橋村立場にて是より廿四町程は西保屋町といふより
又廿一町を経て和田峠にいたる此嶺の峯よりは空快晴なる時は富士山能
見ゆる西坂路に東坂尾を登りて三月の末まで雪ありて寒し地形甚だ
高き所に嶺より出て東餅屋村から沢村に立場の茶店あり是より
上和田へ壱里六町此山中に名物あり所謂九輪草下毛苑虎尾草
釣鐘草中野湯花など多く侍りし茶苑見ゆれ

勇り蹄馬をちらしや和田峠　芙骨

信濃 上和田

長久保まで武里之駅の西に八幡の廟あり和田義盛の
霊祀となるよりて宿の出口にあひ川橋あり和田が原をすぎて

長窪の南に大門峠大門村なり街道より遥に南なる下和田を立場
にして茶屋あり深山口村青原これまで小縣郡なり依田川に大橋小
橋十間許あり南北深き和田山より落来る大門嶺より落る

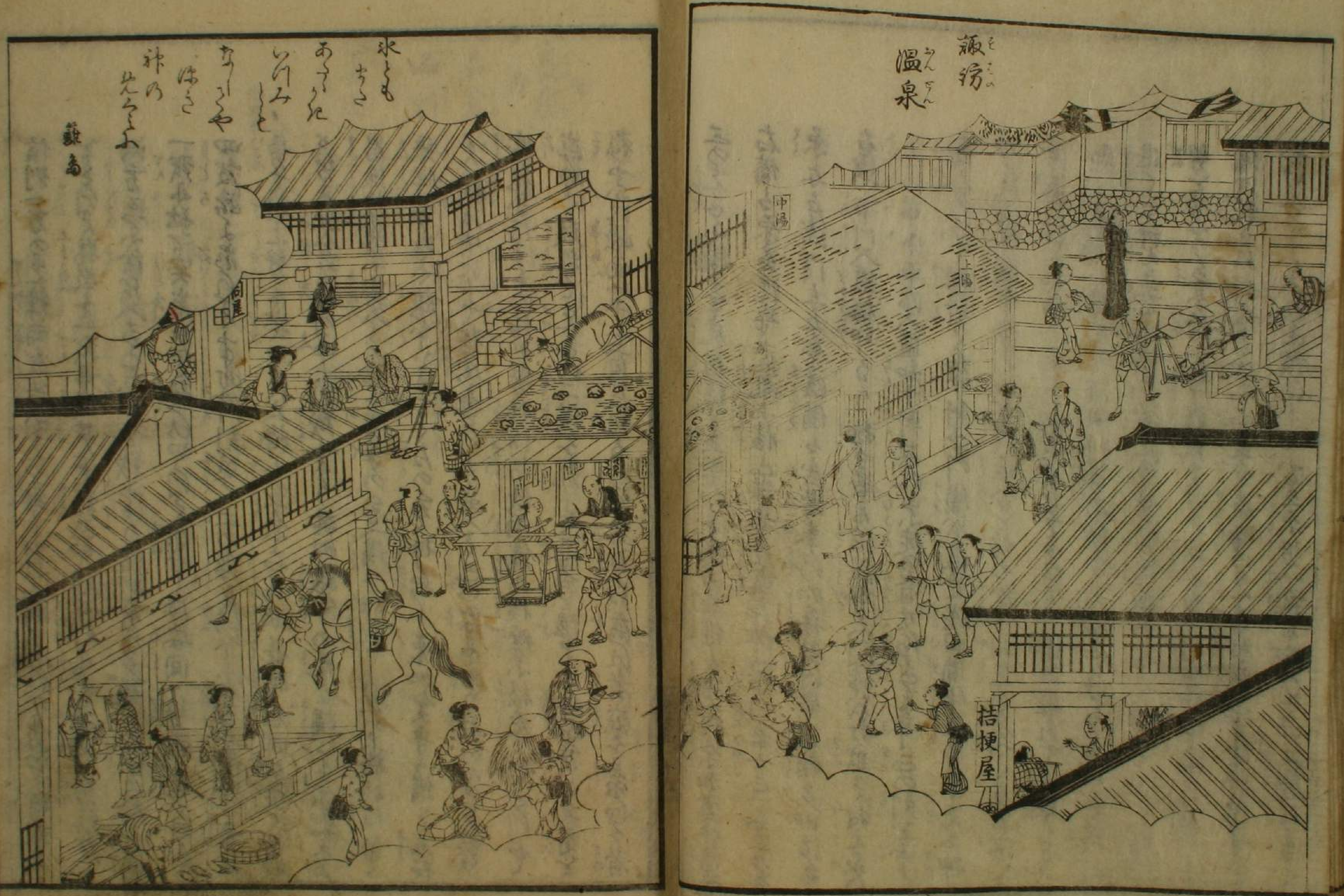
大門峠

又大門村の南にあり 武田信玄也 信州 小笠原との合戦ありしところなり

大門峠合戦伝

小笠原長時村上義清両家の軍勢一萬三千餘人大門峠へ押よせたる
武田家の軍勢も峠へおしよせ中にも其時晴信は安山内膳正秋山
十郎兵衛を召て物見せよと仰付られける二人打出て馳りしが
程なく帰りてかけるは小笠原村上両旗をすゝめて押来る其勢一萬餘と相
見へ然も後に備し一二重まで軍をそなへて懸る也いかにも其晴信が曰
左あらば味方の備を陳せよとて八ヶ嶽の麓甲州道据が原に陣を構へし
後勢の内足軽隊将横田備中守同子息彦十郎甘利が手へ加りて一乃
先に備へ二の身は甘利さかろ同多田淡路守新兵衛父子は
板垣に加りて第二の備の先手は同安間三右衛門尉飯富兵部に加りて

三の先手に備へしは虎昌後を立堅む本陣の前備は士大将原加賀守昌俊
右備は原美濃守虎胤小幡山城守虎盛左陣は市川梁女正一子に三九郎
原与左衛門与兵衛後備は武者奉行加藤駿河守昌頼多田治部
左衛門市川入道梅印なり指る處に信玄勢大門峠を打越て村上家の
先手布下平治入道知十軒其外宗徒の者共何れも未の刻と志し
懸合の汐を相計て知十軒は中川備を進め先横田備中守が手先に押
かゝれ両陣鬨を合て砲弓に迫合を始め鎗の穂先を揃へて互に場を
争ひける平治入道は大剛の者なりければ自餘を追立て士卒を下
知し真先に突てかゝる甲州勢平治入道が働きにうけちらされ一町許引
退くを見安からず思ひて二の手に甘利押かゝりて勝負せし信州
勢を備へ立まゝ終に知十軒討れける峠の方へ引返を武田一所退きて
備を乱されて引退く次に小笠原長時の先手鷲見山多田淡路守也
かけ合せて入乱れ戦ひしが小笠原勢一戦に戦ひ負け大勢討れて


飯坂温泉
中湯
上湯
桔梗屋

信州一万の先鋒両度共ふうち負しかば大将義清大に怒て我旗本
をもつて稿敗を一戦に安せんと鼓ひかけて押来る安間が勢猪て
両方互に猛ほ入るを必死と戦ふたり信州勢は多勢なれバ大将義清
一戦に敵を突崩さんと鼓ひかけて進む所安間が勢戦ひまけて
四度路よ崩れて本所辺引退く二の身に備へし飯富兵部士卒に
勇て村上勢に突かかる大将小笠原右馬助長時采牌を取て兵部
が勢に馳合せ追つ返し戦ふたり其時旗本の前に備る原加賀守
昌俊横鑓に突入らんとす妻手の方へ備を押出し是れハ大将晴信自ら
采牌をとつて旗本をもつて左の方へ押出し原加賀守が備と左右
より敵陣中にして横鑓にかけて突入て巴の字に立り井の字に敵陣
突鋒かけしかバ信州勢晴信昌俊両備の横鑓に敗走してぞ川も
崩れて散乱を先手の二備を乱して追蒐を限りに印を揚げ其首を
数ふるに帳面一千七百廿一級なり味方合戦疵負ふ者疵を蒙むる者

雑兵合せて三百四拾三人なり其より塩尻まで寄られたる（なかきたち大門 軍記にあり）
蘆田まで一里半此驛の民居三四町なる皇宥お封じて巻と
なれ其辞ゆかりの小散在に

長窪（信濃）

石荒坂 此所より岩尾まで十五里 上の俗方へ七里此間坂道なり

石割坂 此坂より道に妙義山見ゆる この店悪し

蘆田（信濃）

望月まで一里八町芦田何某が城跡あり此駅に眼薬を売
海野平は信玄と謙信と此所にて合戦あり又根津村ハ根津
甚平衛が居たる所なり

海野平合戦

十月十九日海野平にて戦ひ果して則ちかの地に押出さる晴信山本
晴幸小幡虎盛原虎胤此三人を召れ景虎若大将なれども項羽
にも敗く勇将なるぞ義清に頼まれて今日の合戦は必定十死一
生なるべし三將大事此軍ハ海野三人物見に行て能見様来るべし
中にも三人則ち飛向ひて敵の様体を下墨し飛帰て山本勘助が申

なるハ敵の備速なる中ニ濁るとやらんの由にて合戦を持久して待ん始く
南家よりの取合戦ハ甚備の兵法厳密よしと申ける原小猿が申ける八
敵威猛合戦を持久く備鼓く相見へ候人数ハ六千の内外よと申ける
斯く三人又諸共も存され治り世継ハしと申ん晴信海野二人の
外ハきこゆる敷ハ急さんとて山本を近付られ備の商議ある晴信味方
備の立様を悉く演合して来虎ハ不勇将なれバせよ味方ハ一万又千
餘騎今日午刻まで兎角して時刻を移し敵ハ此方の吉利不
暮凡割談の大将ハ味方勝べき也存ぜんして終せざる術を教へば
敵ハ決して勇を味方ハ行末の勝利と敗ぜばは海が江一て理不
中まで行かる八備を立置してく陣を鶴翼ニ定らる海野先手なれ
右の方ハ小山田備中守信利先方の相木市兵衛尉芦月甚八芦田
下野守友継平尾光尾耳取縄路平原左兵郡内の小山田左兵衛尉
信玄先方ハ長窪左衛門尉小笛甚八堀尾五郎左衛門和田福沢門

村あり中にも先手は栗原左衛門尉昌清信良が弟にて須田満親が室
賀錦内井上たり旗本の前備は真田弾正忠幸隆丸子屋沢これを
旗本と一手なり旗本の右わき方五町許隔て飯富兵部少輔虎昌是
を援く左の備へ旗本の後備は馬場民部少輔景政内藤修理正昌豊
日向大和守昌時勝沼入道穴山伊豆守信良武田典厩信繁此六頭
城に向ひて本陣の後より弓手の方へ廻り備へたり原加賀守昌俊は
九十騎を従へて引下りて跡備兼て立てたる越後勢が龍の丸備に立
て景虎自身旗本城をつきて晴信の旗本に打合せんと先を残せし遂れ
轡りよしくも飯富虎昌馬上にて武者凡そ一千五百人景虎の奇術
城兵にして旗本の右の備を立堅め先例の赤備にて馬武具旗指あかく
渡くしてられべしを猛勇の景虎案にも相違の事となり却て十九日
の午刻小山田備中守越後勢の先陣長尾正景が手せ互に寄合て
鉄炮を打違る程こそあれ手に小塗を提て突て入りて先登せ

攻戦ふ越後勢戦ひけるが二町許颯と引て次に直江山城守柿崎和泉
守安田上総介甲州の左手小山田左衛門尉と戦ひしが小山田既に戦
負て弐町許引退く是を見て栗原左衛門尉伝ひて誇を援ふと
合て息の太鼓を打せて甘糟近江守が備に突てかかる所に景虎の旗
本より揚貝を吹立させ大将景虎自身宇佐神駿河守良勝を連て
只武藤先手へ馳り采牌を打ふりて手強く勢をとりおさへて武田方にも
戦ふ事は山本勘助大将の後陣にて本陣の敵を魚鱗に備て第二の一戦と
相見へ作へども味方の陣法堅固にして後かんとする小虚なれば西へ景
虎戦ひを退りして引起したるさかへ士卒長追仕つる中に
御下知に注むる非也と申けれど晴信卿百足の指物十郎へかく小山田
栗原が備に觸させられたるは追兵を紙くして敵を追ひ非手の大ひに不教科
西紹おほ足元制法より内場にて追ふ事を起るべしと告て楽
ら衰けるに依て続勢付薬を弾て也して軍城將兵たる今日手討

よろ来の半までの合戦に敵方討手弐百六拾三人味方の討死百卅壱人其日の申刻に及んで首帳して勝鬨を揚ぐ 妻女山が智謀軍記にあり精くみるべし

更級(さらしな)姨捨山(をばすてやま)

蓋田より七里あり郡の名にも 山川 里和 新にあり 更級郡にあり 姨石 いまあり俗に鏡臺山ともいふ

大和物語云

しなの國さらしなといふ所に男住けるが若き時に親は死けれど。姨なん親のごとくにわかくよりあひそひてあるに妻の心うき事おほくて此姑の老かゞまりてゐたるを常ににくみつゝ男にも此姨のさがなくあしき事をいひきかせければむかしのごとくにもあらずおろかなる事多く此姨の為になりゆきけり

顕昭袖中抄云

此頃母の母に昼ありてたるに姨を妻のいふに任て登て更級山に捨てけり 姨の出たる月のあかりけるを見て 姨捨山といふと云

俊頼無名抄云

さらしな人姨のを子にして年頃やしなひけるが母の様に老くちてむつかしかりければ八月十五夜の月の限なかりけるに此母をすかしのぼせて遠く峰の山の頂におきてにげて帰りにけり月をみて詠ける歌なりて其後此山を姨捨山といふ

古今
我心なぐさめかねつ更級や姨捨山にてる月を見て　読人しらず

拾遺
月影はあかず見るともさらしなの山のふもとにながゐすな君　紀貫之

後拾
これや此月見る度に思ひやる姨捨山のふもとなるらん　橘為仲

新勅
さらしなや姨捨山の高根よりあらしをわけて出る月影　家隆

新後撰
子紀に我をも人やなぐさめん姨捨山の月になくて夜も　宣秋門院丹後

續千
月これや衣手寒し更級や姨もその山のこゝろにあきの　藻壁門院少将

新勅
今更にさらしな川の流れてもうき影をみむものかは　読人しらず

續古
さらしなやよそなる月の里人もなくさめかねつ姨捨山　順徳院

後拾
さらしなの山の嵐も声すみて木曽の麻衣月にうつなり　旧

後撰　かつらこむ月をもちて待を姨捨の山より出し月をみしかな　源重光

後拾遺　まてとふや姨捨山の月を見て沈むともなしかなしかりけり　赤染衛門

詞花　思ひても形見てや我身姨捨山の月見るよには　風流まとはもて山の月を詠ずる旅人のうたも　律師祐覚

千載　何ことも月にはわすれぬものを姨捨山のほとにかへるらん　隆源法師

新古今　ほともなき姨捨山の旅たちの月ゆへにこそはなれぬるかな　伊勢

類題　てる月をみて夜ふかくそ更級や姨捨山の寺を詣るかも　後柏原院

六帖　姨捨の月かをもめてしみるこゝろあはれはくまなくそありける　濃人志だ

捨りけり姨ひとりなく月乃友　きせ紙

名の月や田毎乃玉の風清し　難角

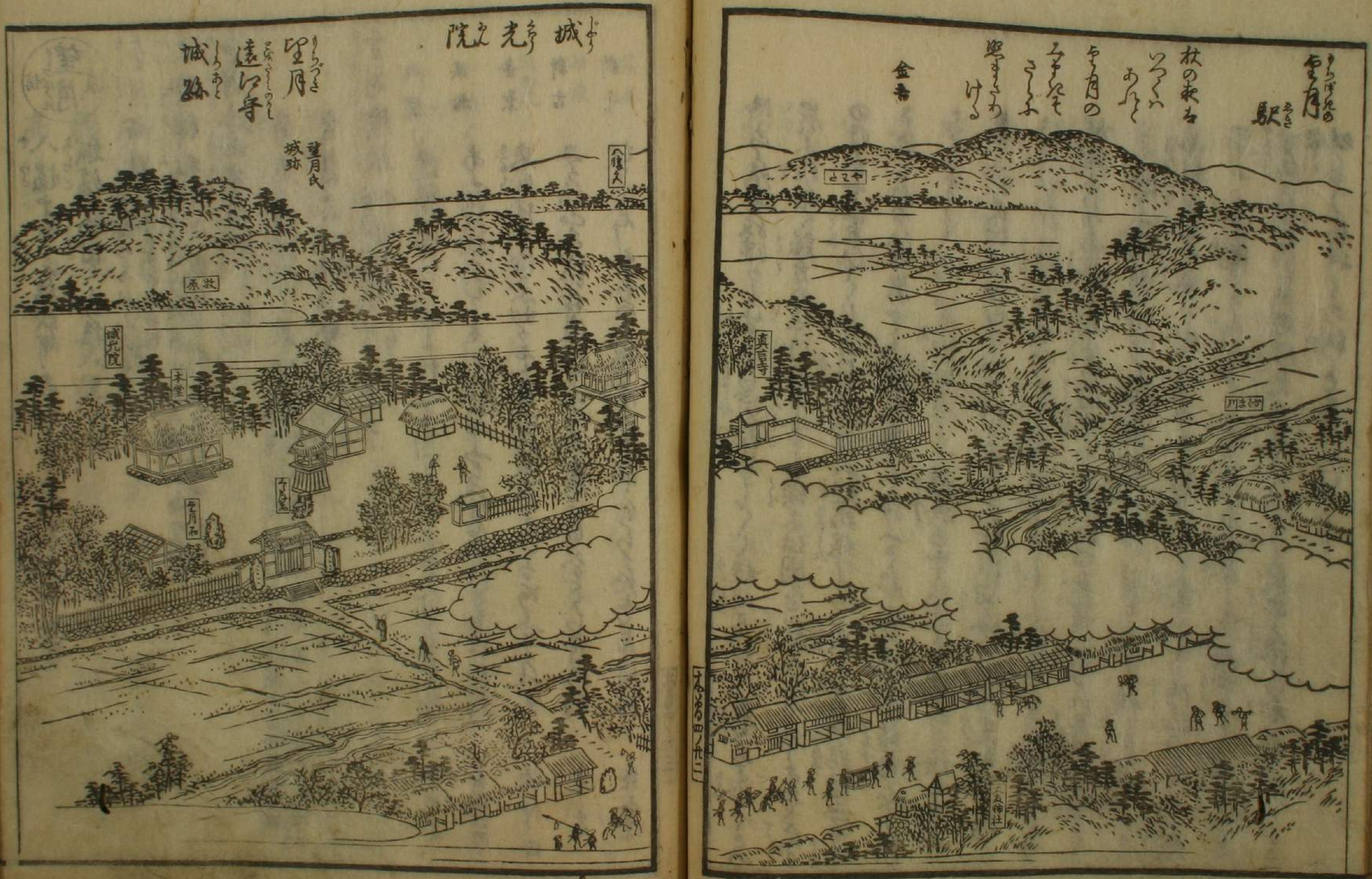
暇をもちてくまなく見るは涼しや夏の月　蕪骨

此外に更級姨捨山は芦田の郷より七里にあり其所は武水別神社あり式内大名神今八幡村にあり社領弐百石又冠嶽の麓にあるを姨石といふ高さ三丈横十間餘此石の上に小さき菴をむすび満月

殿二間四面庫裏三間半巳午に向ふ本尊は正観音放光院長楽寺也号は面る棚田の上に除て神田は千八枚とも号く神供をたて中将徧を祈く水をかよふ田毎に月のうつるをひとつゝに見る山は東面に横たはれ西北に向く千隈河巳午より来て艮に流る月満く浪地みな錦なる小洲ありて左に八幡の杜あり川を隔て向ふに麻績この地あり武水別の神跡ありてなべしかの庵は此宮寺の子院にて念仏の窓をひらけてされども人里遠くして哀れ深し姨石に登りて月のこゝろをしれるを今より百年ばかり以前ひとりの雲水僧此所に暫く滞留していと殊勝にて住持とせしこの地を月の光より雪に至りて唐紙さすらし姨捨山の入相の鐘を聞て三昧を楽しみ中にも白波緑林のたぐひ読経して身をやつし頭陀を行ひぬる事を常とし東は冠山此あたりを更級川田毎の月姨石甚待小桂樹姪石小袋石宝池よりに続く鏡台山有明山など二里余山また雲井橋などして十三景をのこらず

あはれ寺ふたしぬの月を賞ずる縁起あり夫むかし地神三代の尊の御后は
木花開姫とや其御父ハ大山祇命にして此姨姫は大山姫とてふたりまで
醜しく姉ハ世をはかなくして他のよに事なりて姑ハ乙女のまゝ四十を
過させのふまでも誰むかふ人もなし此時は甥の命なる姪の佳くや姫
かく申合嫉妬の御こゝろ起りまた浅ましき人に遠ざかる人もなし自今
御こゝろも更に厚ものを結んでかくこそどれハよろしきむごく姉なる人ハ姨
宮ツまいりにしてもぬやよ交じめんやむもあられど甚くや姫を
此の国に住しあらて所ある夜の月を姉が傍で御こ添すかほに
なりけんとて人の時姨姫いづやよりて住くや姫を添ともにいみ悦び
給ひしいかゞく此峯は打ち入衛の高根にいたり給ふに夜にて姪姫を
かの石の上に登りて指さし此山のかみを添に拝みて丹夜石ありて給ひの上にのぼり給ひ
て御こゝろ行き給ふ四方を眺めて人々も御こゝろ清くいよいよ共にと
姨姫旅の疲れに御身も弱り世を去りし秋の月を眺めつゝ柔和なる

御こゝろ給ひける生じ忽ち大性ましくて姪姫をねたみ給ひしこの
嶺に住んで諏訪の健御名刀命と倶に此国を守んとて今に至る天子
のぼらせ給ふ宮ひとつ月の頃に入り姪姫様しと思ひ石姨姫此山に捨て
させられける事御孫を移し給ふそれより此山を姨捨山といひ
あるひは此山の縁起として姨捨の事によりて姉なる御事故姥捨山ともいふ
見ても此山とも言ひそれより南にむかひ田毎の月の光を移し給ふ
給ひ志なかりし御こゝろみして天を廻ぐるく雲に流されて月明らかなり
嫦娥は月に在りて周生に道術あり中秋の夜宮と名付けし月色皎々く
ある宮に遊ばせ給ふ雲を掃ひて月を眺め懐に留んとして
忽ち数百條の縄を出して高き処に登る事陸地の如し織
にして其の縄よりかけてさまをわが衣に挙げて懐中より明白の月
す弁なる紙出ん照り蝶光あらはれて流人の肌膚にあらく
冷かなる夜の郷をあらはしし



望月駅
城光院
望月遠江守城跡
望月氏城跡

信濃 望月

八幡まで三拾弐町 これより善光寺へ十五里
越後高田へ弐拾八里

望月城址 当宿の東の山上にあり 望月美濃守の城址なり

大伴神社 同所にあり 延喜式佐久郡三座の内也 今御嶽社と称すれども不詳とぞ

望月山城光院 同駅にあり 禅宗曹洞

本尊阿弥陀三尊仏 開基望月遠江守法名城光院殿東岫盛聡庵主 文明三年辛卯十月十七日逝去

望月石 門内にあり **甕石** 同所にあり

望月御牧 望月の駅の上の山坂なり 今牧の系なし

拾遺　逢坂の関の清水に影見えて今や引くらん望月の駒　紀貫之

後拾　あふ坂の杉のむら立引くほどはをぶちに見ゆる望月の駒　良暹法師

金葉　東路をはるかに出づる望月の駒にけふあふ逢坂の関　源仲正

新古　嵯峨の山千代の古道跡とめて又露わくる望月の駒　定家

新千　むかし見しも我へ細く堀れも面かげちらん望月の駒　花山院

後拾　年ごとに雲の上まで見し秋の秋をさへしき望月の駒　後冷泉院御製

拾遺　望月の駒より遅く出でつればたどるたどるぞ山路越えける　素性法師

後拾遺　もち月の駒ひくときは逢坂の木の下やみも見えずぞありける　恵慶法師

世々には例年勅ありて駒牽あり 天皇紫宸殿に出御ましまして信濃の貢馬を叡覧し給ふとぞ 貞観七年十二月に制して信濃国牧馬之八月廿五日に貢ぐ 今十五日に定む これより牧に望月の名有り 御牧七郷の中にて此辺をみな御牧ありしゆえ望月の駒と世にいふ 又望月の神の嫌ひなりとて望月は七口の内鹿毛の馬は当所へ他所より来りても一夜もゆるさゞるとぞ

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡	塩原牧 同	岡屋牧 同
宮處牧 同	殖原牧 筑摩郡	大野牧 伊奈郡
平井弖牧 筑摩郡	笠原牧 伊奈郡	高位牧 高井郡
新治牧 佐久郡	大室牧 高井郡	猪鹿牧 佐久郡

荻倉牧 佐久郡　塩野牧 同　長倉牧 同　望月牧 同

角摩川 水源は井守が渕より出る下流は越後へ落る此間に月の盃欲しもうけし二里下りて千曲川に落合て流る

瓜生坂 より坂を下り狭金山坂とて塩灘まで弐十七町 駅の中に布引山への道あり

信濃 八幡

八幡宮の並にあり

六十六経塚 御所宮村にあり むかし澄覚上人といふ僧日本六十六ケ国へ修行して此地に六十六の塚を築き塚ごとに法華経を納めしとぞ

筑摩川 大河なり流れ二ツ有 極めて広くなる千隈川或は千曲川また奥麻河とも書

水源は佐久郡金峯山の麓に出て初めは甚深き洋の瀬を浮べたる飛びし三ツ井津より出る梓川あり是を会て佐久小縣の郡を流しめる河中島四郡の境を流るゝ犀川は駒が嶽に出て筑摩安曇更級水内の界を経て筑摩川に落合ちくま河

とりて越後の新潟にて志なの川といふなり

万葉　信濃奈流知具麻能河泊能左射禮思母伎彌之布美氐婆多麻等比呂波牟

風雅　ちくま川春ゆく水はすみにけり消えていくかの峰の白雪　順徳院

新続古　君が代はちくまの川のさゞれ石の苔むす岩となりつくすまで　式子内親王

雪玉　名のみして千隈川は猶や岸は雪に神もきむ　逍遙院

扶桑略記云 仁和三年七月三十日信濃國大山頽崩山河溢流 六郡城墟拂地漂流云云

六郡は伊奈諏方筑摩安曇佐久高井

金峯山の麓に山夫あり人を呼んで扣ぬる一声二声三声戸ほどまで呼ぶる本道あつて逆立るといふ又大人の乳様なる石を多く本石に見られびかしして人を目送ん又山姥の履とて長三尺許藤かが曲る木皮をあみ作るその外る関く其辺の老猟夫の山の老猴が飛猿のやまことかまり老大なりといふ

川中嶋

八幡より十里斗に有り 甲越両将数度戦ひし合戦場なり

山本勘助記

上杉入道謙信ハ川中嶋の合戦に是非勝敗を決せんとて武田の先兵を
妻女山より切付ざる事ハ勝負をせんとまちさだめしかども飯富昌景が
備乱れずして十分すゝみて兵をひかず山本が兵法勇力の足並をもつて
持続が備へ乱入しが謙信今ハ何ぞ一合とぞき候へ三甲三かし信玄の
旗本へかけ入り無二を一時に決せんとせし後陣の甘糟直江等に支ら
軍の越国をへしとせ中渡しみづから旗本備一千余人の兵を率し先
陣をうけ抜横に敵に馳通て信玄の床几の備は向かうけ突かかる武
田方いる手備と乱されて悉く先陣飯富が備と甚穴山が備をも
信玄の旗本も只三備たる場を去しておそる謙信に打の新
手に遅兵を率し有無を存亡決せんと勇事日に百倍して突
入りる旗本の者備にあてられ今日三年長坂釣閑跡部大炊助に
立向ふて防ぐとへども上杉勢勇壮にして手勢なれば事もせん

揉立られ今日長坂跡部の二将其勢に離しかくて突立られて
散乱せし討に謙信ハづか三尺六寸の大太刀ぬきかざし只一騎信玄
床几備に馳かゝる信玄驚かれながら近習等に命じて防せられ謙信
一世の勇を振られる武田の兵士あらひ討てされども手負て倒れし
得に信玄も今ハ助る者なけれバ速に逃れのくれどもと討れし支
去てハ趣後軍と数年の武功もかの泡となるべきと覚悟してかしを
登ぐ床几にかゝて動ぜずして押へ居るを謙信まおる大刀切くく
駆んなく信玄の床几に迫り只一討と思われしが同じ姿の信玄二三人
まで我有る謙信まて迷って打漏せて終しが流石良将なれバ
其後相を考へこれでも見るるる駒を馳寄る大力ゆよく馬より
切先ちうの小振を揮けと切付らしを信玄床几もさばらりく小手
刀を抜て請留しかしが敵将謙信が大力をに長くすぐ延びる
ゆえ其後に信玄疵をこうむって危く見ける左右の新武者廿三四十

筑摩川

あらふれ
家なゆくく
千ゟ為河
気さく挑花
うけ流くして

三州吉田
義方

謙信に打向ひ主人をまもらせて戦ふ所に本道の後にまはりし旧と出立の
新武者出来りて声をかけ謙信あまりとそ振舞ひ其の武者にて成
智謀の綱に縛しい入られべ道なき事あてすまじ近よの者に打ちらんより
信玄みずから其首を討取べしと味方の者共も謙信にすて組んとするに
いかに何と云ふ実の信玄ならずやと怪しみ思ひ出立の家来二人も添まいらせ討ち
とらば其中には信玄ならん事必定なりと思ひ片目に武者する三人を討ん
と火水よなかつく戦ひける此時勘助入道先手に加はり敵の先陣を
伐崩し大将謙信に逢んと尋求しかども双方乱軍にて成さく紛らう
し行に味方の旗本ふを取りしと急ぎ返れ処に敵将謙信轡を並べ
切てかかる二本備を崩し信玄みずからさて何の方へ当れるその首なる
当世上本道鬼を大事ぞと走らる馬に鞭を当て雷電のごとく道
早く跡先や西や陰陽の間に無二無三に謙信目がけ突かゝる
其途先をさえぎりて其の謙信なりけて何かかる我殿ひまん

坊とかん事奇怪之せられける所ぞ我ぶ是に山本勘助晴幸入道かけあはせ名乗りけるに謙信も無双の曲者なれバ返し合て危し遠信去に出合取かゝる

此侭退んを残念かりやとられしかども続く味方を呼かへしけるまゝて空しく討死も無益なり一旦退き味方の兵と志を合ん人と見勝し

山本がつき捨て馬の返されけるを勘助入道掌中に入たる敵将なれバ逃さじと飛がごとくに追かけしが謙信の乗馬は放生月毛と号し当世無双の駿足なれバいさゝかも労ぬ事なく騎人も名誉の達者なれバ

左勘助入道いかに猛しといへども追つく事叶はず謙信ハ味方の陣中にかけ入らんとせし程に山本道鬼ける心にて思ひバ無念なりと頻に馬を打て既に其間五間ばかりに近寄けれバ謙信は持たる鞭を投打にして打ほどなく拂ひけれバ謙信の乗たる馬の尻へ中に突当りしが其遠物なれど鞭もろ共に強く打あたりけれど獅子が中遠

去ゆるくも大に程なく犀川の方横筋に分け出ん其早き事烈風の

ごとくなれバ終に行方を見うしなひける道鬼歯がみをなし敵軍を白眼んで立たりけれ

八幡の駅を過て今世いふ村下原村みまゆせの左の方にくち落川見ゆる法々おもひハ経過ゆる山河も変ぬ見ゆるなりけり

きのふとやいはん今日とやいはむ世の中は今こそおもへバ昔の事なり今とむかし也其中をくは我心ひとし古今を隔川の中に我も往の事まれふとせしあとへのふの変ようのなかに此所をも過ぬ明日又いづまれ所なして今もきのふといはん御ようにめるなかの年月を変るやう変にうはれぬれど見よくたどりけり塩灘とて駅に従ぬ

信濃 塩灘

岩村田まで一里半駅内三所許お對して巷となる餘も散在れ入口に瀧明神あり是は又母が大しき跡あり

駒飛明神社 又母あり 駒飛坂の是なり

同云むかし此牧馬塩灘の中なる浅間山の林叢なる石佛也とゆへ

まへの里なりし此民何某といふ者元禄の年頃駒の形ある石を畑ゆ
見し事ひと夜ふた夜にあらず其ころ大なる畑といふ地より駒の形ほりいだせる
石地より堀出さるべくこれを感じて年々花見月の中の七日を以て
祭る其石の形

佐久郡柏木村
新田

横二尺七八寸
高サ三尺四五寸許
後の方へ長く甚不形なり石を真石駒も同色く
駒の形の内を弐三分程高るし

今も社を建て駒形明神と崇め祭りてしく
此駅を過て下塚原上塚原を街道より小みあり往く塚むら
を越て平塚原村よりいる

相生松　平塚村にあり　又新田にあり

信濃
岩村田

小田井まで一里七町　駅内の町五六町あり相対して
巷路あり其餘散在ん善光寺へ別道あり又小諸まで
道二里なり又甲州路の道條あり当駅は内藤美濃守殿
の領地にて商人多し

住吉祠　駅の西の出口にありこれより
かるいざ原　小田井まで原野にて家なし　右は明神の馬場にて芝生に鳥居あり左は明神の杜有

信濃
小田井

追分まで一里十町　駅内弐町ばかり多くは農家にして
旅舎おほし宿悪し東の出口に薬師堂あり追分より駅近
家なし
此駅の中に溝ありて流清し用水ともなる是を過てある所村
ありこれより飯盛が嶽八ツが嶽見ゆる二三四月の頃まで雪ありて見ゆる
前田原大久保橋を渡て追分までの坂道ありて追分の駅に到る

信濃 追分(おひわけ)

沓掛まで一里三町 宿よし 出女(でをんな)あり

此間石ある坂して道わろし

東山道 追分 宿の西端より右へわかれ越後へ行越中加賀越前と経て

北陸道 追分 道は中山道とて京へ出る左の北陸道よりは善光寺へ十八里越後

の界関川より此所まで追分より廿八里越後の高田へ三十里也追分

より小室の城三里半ゆく小諸より此所あり牧野内膳正殿領分也

小諸田中と経て上田へ行て件を北国道より追分より上田へ八里半

あり筑摩川の渡より松平伊賀守殿の居城也越後より往の要路

ある也国中絹紬魚塩なども多し此より上田より此所も上田乃

奥にあり又上田より八里半奥に松代と云所あり真田右京大夫殿の

居城也其先は丹波嶋より此所あり筑摩川をわたる此辺川中嶋なり

筑摩川と犀川との中にある所へ川中嶋より其辺に横田川あれは

むかし木曽義仲と平家の方人越後城四郎と合戦ありし所也

東鑑云寿永元年十月九日越後住人城四郎永用相継兄資元当国跡欲奉射源家仍今日木曽冠者義仲引率北陸道軍士等於信濃国筑摩河辺遂合戦及晩永用敗走云云

浅間嶽(あさまがたけ) 小田井と追分の宿の北にあり浅間山の麓を通る

古今 雲もゐぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ　中興

後撰 信濃なる浅間の山ももゆなれば富士の煙のかひやなからん　をはか

千載 霧ふかき浅間の嶽はみえねども刈しかやの枝をかくるまと　為家法輔

拾遺 いつとてか我恋やまんちはやぶる浅間のたけの煙たゆとも　紀貫之

新古 信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人のみやはとがめぬ　業平朝臣

同 いつまてかあさまは名のみ里もひとぬる遠近の山　雅経

新勅 思ひかね浅間のたけの煙をもしたへる清き人あらん　源有家朝臣

続千 立のぼる浅間の山の峯はさぞかし我人のこゝやおもふらん　津守国道

浅間嶽（あさまがだけ）
八ヶ岳
追分

新續古　春霞浅間のたけにたつけふり雲もかすみてみえし　後京極摂政

夫木　幾世へて絶ぬ煙を浅間山たえぬおもひに見する成けむ　月花門院

金葉　いかにせむ忘れぬ我身は浅間なるけふりの末の心ちこそすれ　源俊頼

浅間山記　賀茂真淵

浅間乃山をやまと人はしらぬ人なく名高き山なれど今の道にたちよりて見されしをも目にしるは只かうてん人と聞えしかとは雲ゐるいはほにおもひそへしかと今つくるまでも神あり年ふりて雪山乃奥にもかくれたるあれはかくて木のもとのひかく背面の方より山の上つ真清水の新らしき落ちの山乃ふもと廉の処りえやまくさくのふしだち山乃かけ、はるかに見ゆる岩はなれあるさまもいとおそろしきをふすみなとかのさかりの天津日の光にかかやける此の科戸の風のさそひ来て絶えすなる是は此天の御柱ともいふへく見えてたちてわりなくも見ゆるあやしき宮をも高天の原ちかく立てたる又足一つあかりて天の原に立たる此方のきはみまでよりそのほかの国々より眺めに煙のたつ度に万百千代を経て宇頭(ウヅ)なして其かたちもさらに門(ツ)嶺(グ)を構へたるは此も天地のはしめより此山を割あらはれしより奥土(ツチ)のみならず萬の灰もさかしとみえて煙の方の霞たなびく八十(ヤソ)雷かとも伊吹の炎も怪しく思ふへし飄(ヒサカタ)の天の原もくもりかかる事も此月日のかけもかくれぬるはあやしともさしも燃えつくすことのかきりなき事のあやしく鏖(アラカチ)金(カネ)鉄土(ツチ)をもて撫しつくさむと天地の神々もいつくしみたまへるもこの天津神の御心にかなはねは萬乃神のほかに知らぬ事もなし

やまとの言葉

浅間(あさま)が嶽は極(ごく)高くそびえても此世の葉末乃地(ち)にもなし山の上(うへ)も尽ることなく見てたちのほる煙の浮雲(うき)の上にのぼるなり

朝より午時まではけぶり立ず大なる時は烟り絶ず此山を半より上は草
木生せず一円に中より烟り立ち時ありて大焼する時は五里七里乃間
震動し鳴動を四方へ響き焼石の散ひを飛び焼する事あり焼石も飛で
此焼石道のかたはらに多くあり事此石より外は軽し色は灰色にして
おもしろく軽く糠の如なるゆゑ所々に集め積み大焼へ中れば小焼
は時々あり江戸の方へ風吹ても此山大焼の折は灰の飛来る事有とそ
いふ此山は江戸の方へは近く三河尾張の方へは遠し伊勢物語に業平の
道行の時伊勢尾張のあはひの海づらを行とて浪のいとしろく立つを見てよみたる歌よ
書れしかども伊勢尾張の方よりは道の程遠く山も見えず浅間が
嶽に燃ゆる業平は武蔵上野の方よりは浅間が嶽をよみ給ひしを
伊勢物語を編む人前よ書入しにや追分の駅より此林藪まで三里
あり又林藪より岩まで三里半なり岩の中に巌窟ありて虚空蔵の石
仏を安んず絶頂の大坑より常に煙立のぼる事は硫黄の気なり硫黄満る

時に地火突発し大石はじめ砂石を降して林藪を焼く其時は
数百里に聞ゆ此山今夏月は常に雪を持ざれども立春の後百餘ヶ日ほど
て雪の晨のごとし又中程より麓までくあらひに索子く寒ても作物
なく又此山の麓に落葉松生ず富士松のごとし又此所に草生ず僅に林藪
の追分より軽井沢まで土地別して高き所にて寒気甚だしく五穀
不毛の地といふべし

諏方社 宿村

蓼科神社 右宿村にあり 三代實録 貞観二年七月 授従五位下
例祭六月十五日此所の生土神とす
追分の駅は殊に賑しく小國の諸侯多く往還し旅ひとも多く籠
舎も多く又奇麗にして是より軽井沢までみな浅間山の林藪なり此駅を
過ぐれば宿。あるは古宿を経て沓掛の駅にいたる

信濃 沓掛

軽井沢まで一里五町此駅中三ヶ所ありて左右に対して巻く然
かれ餘る数十し農家多し宿の入口に浅間嶽への道あり

追分沓掛軽井沢の三駅ハ浅間山の麓にして其麓より嶺まで
一里半といふ沓掛より軽井沢まではみな平地なり

塩沢 左の方に霊陽の池あり樋より流出て此池より湧まいりて小溝あり水清し

竃石 下沢にあり左の方に見ゆる

沓掛をすぎて松並木鳥沢村におし坂あり左右の田畑なり塩沢村
坂をこえて新田むらをすぎ離れ村左は放牧にて山あり此辺を平原と名づく
いふ道の左右みな原なり

坂本まで弐里八町 沓掛より左右に対して巻をなせん
其余は山間に数多の沢所を遠近里より伊勢物語り
よりて旅人の名付しものなるらん
軽井沢より碓日嶺まで廿二町ありて東の坂本まで二里余
なだらかな坂に清水より甚ぐるし信濃ハ日本の内にて至地形乃
高き所にて其ゆへに海遠くして山上にある国にて四方の儀なり

信濃に到りてはみな登りにて甲斐飛騨も地形高く信濃に続くといへども
信濃より低し故に冬春の比は雪深くして寒し北国は信濃より
雪深けれど地の低き故此辺にはあらずとぞ就中軽井沢沓掛
追分れ三宿ハ浅間嶽の腰にて地形いよく高し此三駅の間南北
里なり東西弐三里が程平らなる広野にして寒気甚しくて
五穀生せず只稗蕎麦のみ多し又菓の樹もなし民家にも植
木なし

碓日嶺 軽井沢より廿二町此坂の上にあり民家あり 碓氷 和名抄 碓日坂 日本紀 宇須比坂 万葉集 牟吹野 夫木 春日 白井 東鑑 笛吹嶺 太平記 とも書り

名義一説に日本武尊此地に登臨し給ふといふ又此尊東征し
給ひ碓日嶺より辰巳の方を眺望し橘姫をしのびて三度歎して
吾嬬者耶とのたまひし此所なるべし是より東の国を吾嬬とは
いふなりと日本紀に見えたり嶺より少し平なり
然るに峯に熊野神社ありて手向して通る人毎の旅にて此嶺を

碓日嶺（うすひのたうげ）
熊野社（くまののやしろ）

西より坂東に入る境なり東海道の足柄山箱根山の如し碓日坂より东を
見まへ武蔵下総常陸上野なぞの山々ゆゑか筑波山日光山精に
高く見ゆるなり

太平記笛吹峠合戦之事

新田武蔵守義宗は足利将軍の御運に退縮して石浜の合戦に本意を
達せざりしかば武蔵国を去て越後信濃を後に当て笛吹峠に陣を
とりて程なく寄るを待て居たりける所へ大江田式部大輔上杉民部大
輔先鋒として都合其勢二万余騎先朝第二の宮上野親王を大将として
笛吹峠に打出れ将軍は小手指原の合戦に本陣を去て石浜に於て八万
よし寄くるを馳来りて其後千葉介小山判官以下大将として
都合其勢八万余騎将軍の御陣に馳来る羅(?)余騎義興義治七千余騎
要く名刺を付きて宗との武蔵にて新田義宗上杉民部大輔一万余騎
にて押寄りと宗徒の人々向ひて定めて宿所ぞ打勢の者また
よ大敵に打勝ちべからず小勢は敗れても退散すべしと究竟一途に

定て将軍は二月廿八日石浜を立てむさし野府に着給へば甲斐
源氏武田陸奥守同刑部大輔同修理亮武田上野守同甲斐前
司として都合其勢千余騎にて馳来る同廿八日将軍笛吹峠へ押
よせ給ふ敵の陣を見わたせば小松生茂りたる小河流るる山の南に陣に
取て峯には引両の御旗を打立たり麓には白旗中黒棲桐の紋に梶の葉の紋
の紋有ける旗ども其数満ちたる陣の一番には甘粕の者案内者なれば
よて甲斐源氏三千余騎にて押寄たり新田武蔵守と戦ひしも
荒手の越後勢同三千余騎にて相戦ふ事に時移る程に半時ばかり戦ふて
逸見入道以下宗徒の甲斐源氏百余騎討れて引しりぞく二陣に
千葉介宇都宮小山佐竹が勢相まじりて七千余騎上杉民部大輔
が陣へ押よせてかけ入戦ふに信濃勢討れ百余騎討れけれは
寄手も三百余騎討れて相引に左右へ颯と引わかれて両陣入替りて
追つ返しつ其日の午の刻より酉の終までおし名誉なく終る

たとひ寡して兵わ夫小勢をもつて大敵に對するハ鳥雲の陣にしくはなし
鳥雲の陣とハ先後に山をあて左右に水沢堤なく敵を平地に見
おろし我勢の猛を敵に見せずして虎賁狼卒かるく射手を遣せ
戦ひて此陣章に鳥雲に向まで待く戦ひて利有べからしと武藏守
若武者なれバ無段度々ふりけおくて大勢にさゝへられる間百度戦ひ
千度かけ破るといへども敵国にあふる程の大勢なれバ新田上杉つゐに
打まけて笛吹峠へぞ引上りける下野妻しきを平沢と名づく

笛吹峠上杉武田合戦之

此武田大膳大夫晴信ハ瘧病にて引籠り居ければ代官として
板垣駿河守を大将となし栗原左衛門尉詮冬日向大和守小山田左
兵衛尉小宮山丹後守昌友逸見勝沼小曾南部小信州先方芦田
下野守相木市兵衛尉を指副られ其勢都合七千余人十月四日に甲
府を立て擦よ擦て押行に同じき六日の巳刻に小室通の追分を過
軽井沢を打越て笛吹峠に押付る上州方は先陣ハ上田又次郎

笛吹峠のこと
日本武尊ハ碓日嶺
より辰巳の方を見おろし
橘姫をこひしく吾嬬
と宣ひける人の詩ハ
金石のごとく後世までも
称しける

見田五郎右衛門松本田舎なり既に二万三千余人の軍勢先手へ五千余人
宇佐美駿河守は此方へ打越後陣を堅く備を立て作の彼方に押付たる大将
板垣信形今日の先鋒を信形待て備へしとて宇佐美駿河守向ふを従く
見上れば敵は漸く三万一作ぢ此方へ討越たる後陣の勢を待付て合戦
を始んと対陣を無し猶も寄る敵の大勢を越ざる所に忽ちに打て攻
崩せし一陣に跪き一条陣を立つて下知なし下呂宮跡と云ふ者に
敵の先陣上田又次郎が先隊藤田丹後守が陣し先釈を招く突てかゝる
三科肥前守も広瀬郷左衛門尉一番に陣へ入三科に続のぐ十二年つゝ是
打まで下せ突入て追付けるを見て上田又次郎藤田付
すべて続きやよし丹後守も下手に在つてお鉄炮藤田士卒と勇みを白
鏡を抱へて組まつ所を広瀬郷左衛門生年十七歳と名乗て丹後守
に押寄り引組で両馬が間に落かゝつて土ぢ勝負をおらそひ傍が
難なく丹後を抱へて首掻切て起上る所を藤田が従兵三人を討せ屑に

せんと追取巻広瀬が郎党も郎従を見て追く小荷駄の敵の郎従を
中に取籠て足下に五人突伏たる残党傷を蒙り是非なく其場を
敗走に上州勢は後陣を備へて援をまとめるを板垣急に切崩しても
大に敵軍辟易して旌旗四度路に乱れし丹後守も早討れぬと
叫びかけ来る者ども返し合せと坂井に下知ぞ前後を見合せ
明が軍勢は見つぐ続ひ来る敵兵陣を場をきしと控へたる
上州勢の二陣作兵衛集人これを見てかきたる一着して追て武田勢
の曲淵左衛門一番に陣を入て生も能敵を討取るも進んで攻立る
二番に続て曲淵に押しぬ剛兵多き陣の神保がほどに闘を催く
馳入しは作の此方に討越たる五千余人の軍兵立足もなく一戦に跪き
られて右往左往に逃走る所を集人踏止って守返しを心掛るは
風情あて敗士を恥しめ居る所に三科肥前守生年十九歳にて不覚
ぬすると正しく先手の前後者と覚えて斬級軍に及ずして上は以下

切所にて公の使に返しもあへざれば見事にそれがしに拒みつゝそのうちに
速に勝負して敵を打ねば首をとらんも敵の大将に仕寄てもって将に陰撓て
ければ今は公将も運も昨日も互に陰は打合せて皆く蹴ちて見る処に
三科力是を踏で鉄砲も碎声して実検に與人の肉甲を突きて馬が
逆まぞ落けれる肥前守を右衛門が首をとる事なく二陰三陰に相ぞ
挙動て則首を捧ければ松井田三神を見てくれたのよ時を待ち比類の振
舞なり是非に返して討死をせよと究竟の者を馬前に連て備を廃
ければ立て切所を越せ二角三の段討んとれば栗原日向桐原芦田が
始として胴勢をりて突かくる中にも上野井を後ち向象左衛門が首を
とりて己を手負引退て上杉勢散々に討負て旅を越て敗走るを追詰
て討死て敵の首級を取る事一千弐百十九級武田既に勝て小谷まで
大に勝其日の午刻より大将穂河高信が勝鬨の法式を執行せ
其身床几に腰をかけて軍政を奉行せる分捕をさせて主将の如くして

天晴美くしく見えし序かつきの笛吹合戦記を往々見るべし

熊野権現社　碓日峠の町にあり本社三形末社多し鳥居額殿神楽殿石階あり此宮より東の方に二王堂あり

信濃上野國堺　熊野権現の前に境杭あり

刎石坂　ひがしへ下て坂なし此末れのぞれ茶屋ありこの往よりくぐり十八町坂険難なり

万葉

ひなくもりうすひの坂をこえしだに妹か恋しく忘らえぬかも　読人しらず

山中に句碑あり

飛ともり絵ぐくらし猿におひぬころもがへ　そせ

碓井坂をすぎてせわ坂嶺に向ふ此所よりく碓氷ひちに赴く山かさなりてまたこれぬ河を隔ちて浦に遙ぐて見る集里を離れてくるに新路に赴むくこそいづまの日々故郷に帰らるを遊をあくべき道ばれはおろかなるまでもなつかしく覚しもおほかしこの一盃の酒に酔ふても道に倒れても泥のごとく形もむしろ峯牧をすぎ碓日峠にいたりてやすぐ権現を拝し山中村より刎石坂を下て覗の堂屋に覗ひ伯夷にありて蕨餅を活して茶より下て坂十八町あれ

路なしたればこれをひかえん坂本の駅にいたる

上野　坂本

松井田まで二里半当駅五町許民家相対して巷をなせり

路より巡り小散在れ

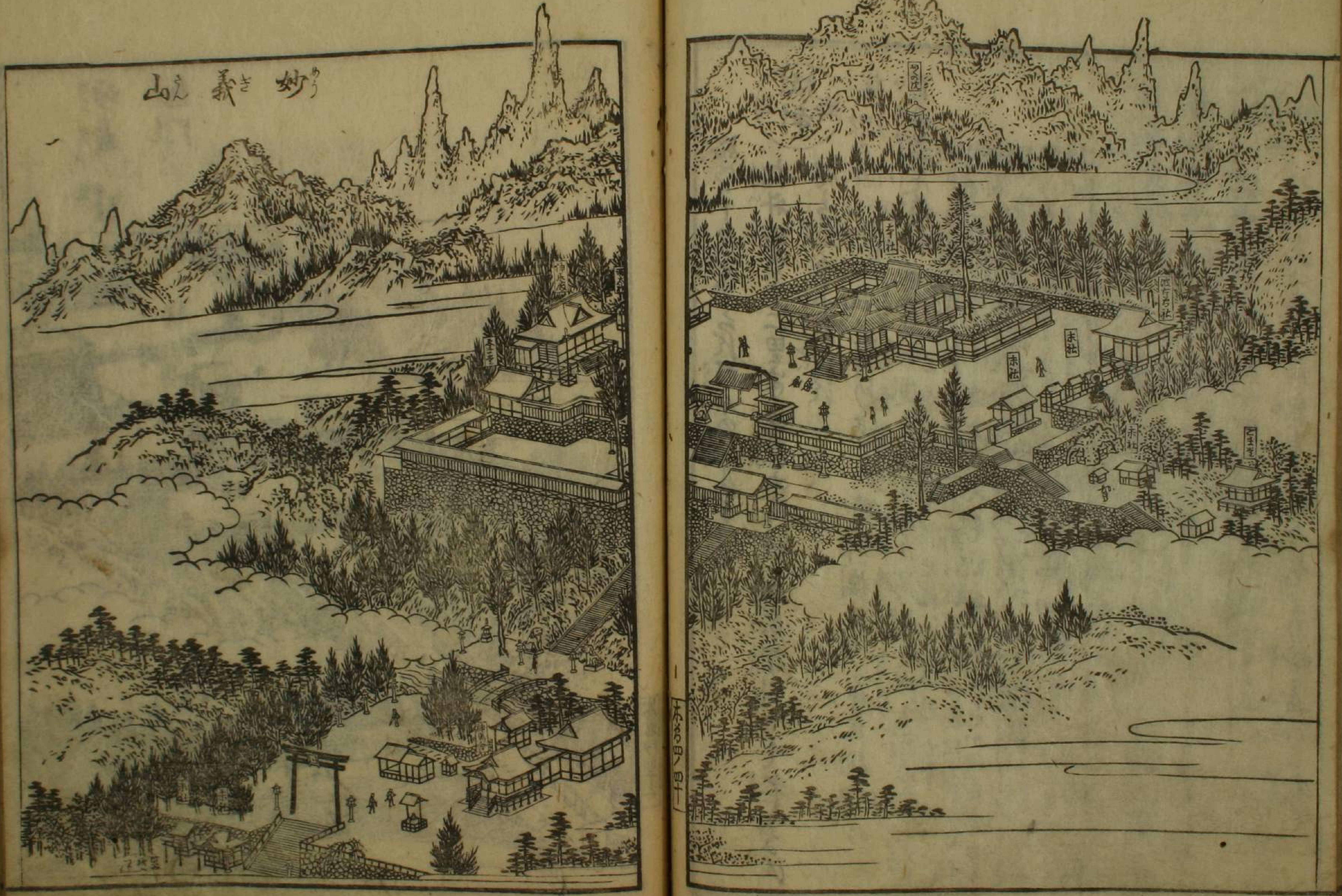
横川　碓氷川の流をなりあこに女夫瀧のありて横川の衝楼あり此所横川の関所なり

百合若足跡石　小山沢の道の側にあり又世俗の説に古書に見えず百合若大臣の跡なりといふ又鷲ひとつの大臣の古跡あり百合若大臣もろこしの人にて武勇あり是弓をひきし人なりと伝ふ此所に百合若の石にいひ伝へし事を述し又つぶさに武勇の事を記す百合若大臣武勇すぐれしひとなり

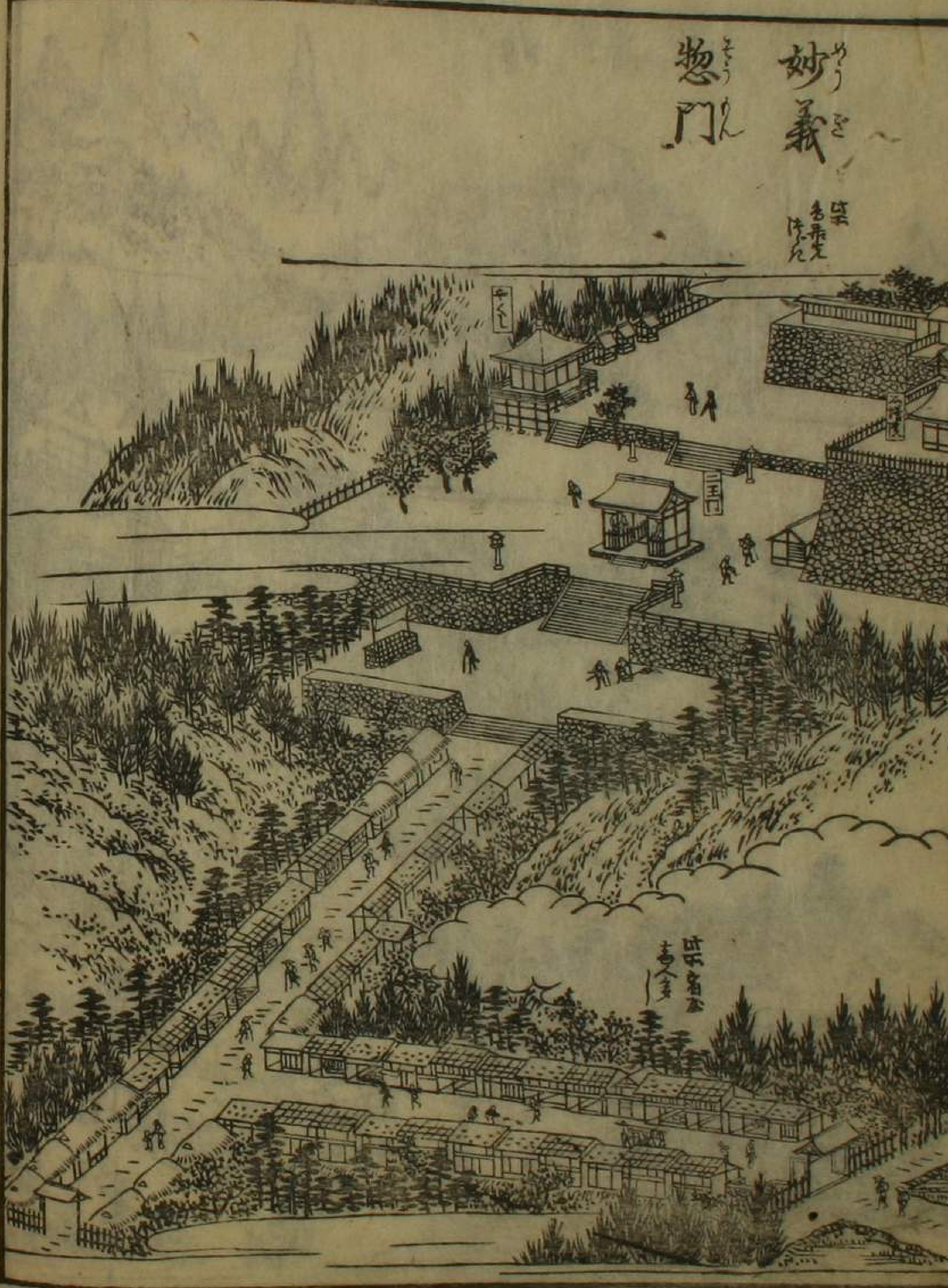
射抜巌　穴巌ともいふ世に百合若大臣の射抜し巌なりとて巌の穴に矢の跡ありて今に残れり

鼻曲山坂　安中まで一里三十町　此駅を松枝ともいふ八幡宮の社あり是より妙義山に赴く

上野　松井田



妙(めう)義(ぎ)山(さん)



白雲山高顕院俗に妙義山と号す松井田より入る又横川よりの道あり門前に旅舎多し
本社妙義大権現社殿美麗く鰐口を掛る
波古曽神社なり当山地主神
天神宮　太神宮　末社八幡宮大日　山王金毘羅山神　廿三社
神楽殿　絵馬舎　護摩堂　御香水中段にあり
辨財天社　飯綱宮　観世音　歓喜天
飯綱不動　巌窟大荒神大日如来を安す　中門両脇に高麗犬あり
廻廊巫女列を系諸人に神託を述く其人の吉凶を告ぐ　石階百六十五段
御湯釜三ツ　随身門左右に随身立かに二天を安す　石階百段
鳥居額白雲山　辨財天社　稲荷社　大黒天　人丸社
疱瘡神　薬師堂　石階二十八段　本坊石の右にあり　橋渓川にかゝる
石階廿九段　神馬舎下段の北にあり　惣門額高顕院二王を安す
そも〳〵当山を波古曽神社と云往古よりの地主神なり延喜帝の

御宇延暦寺第十三の座主法性坊尊意僧正此御弟子菅丞相
ゆゑありて左遷せられし事に拘りて台岳を退き此妙義山に閑居
し給ふ其後此御山を青岩峭壁として山勢に幽人偏に恐るべき霊
嶽なり遷化の後ちに妙義権現と崇め貴賤の尊信怠る事なし
特に今より百五十年前斎特ありてそれより宮舎殿閣壮麗に
再興ありて日夜詣人絶る事なし本坊を石塔院と称して天台宗
東叡山に属し例祭は九月九日山中に大杉七本あり何れも尺尋
五尋まはり奥院は本社より廿八町あり岩角を伝ひのぼれば
大日尊を安置し門前の旅舎は武州群参のためにて山岸に書院を
調ひ詣する人の宿とす此社の神主は一家にて百余人も泊りて饒わひ
いとん方なし霊験ありとて関東の人民是を敬仰する者多し
に詣を詣人多し此山雷電の霊地にして此山のすがた世に類ひ
なき奇異の分野なれば神霊ある事むべしかな名山なりけり

霊ありて坂に祈れば婦人志あしありと覚えられける

琵琶窪 坂あり是より江戸まで坂あらん

原一村 平地なり宮の窪ともいふ
神明の祠あり此辺郷細縄を
製す又竹細工の者あり

松井田を出て逢坂の神明あり是のうへ丹波産を東坂より妙
義山へ詣るには横川より入て此坂を出る又江戸より詣るには
右へ折て横川に出る也琵琶の窪此坂を越えて上野の巣
山王村より山王の祠あり八本木村より観音堂あり原一村
一里山むかしあらく安中の駅にいたる

上野 **安中**

板鼻まで三十町此駅は板倉伊豫守侯の領地にして民家
十余町あり其余左右にあり
此駅をさりて碓日川あり此又中宿の出離れにて又此川をこえる
まへくは安中川といふ中宿は是より鷹巣山の岸根は碓日
川流る急流なり鷹巣山を切立るがごとく崖岩山く

上野 板鼻

高崎まで一里三十町 此駅民居三ヶ町ばかり相對して其餘ハ散在也

貫前神社 板鼻の南の高き山にあり一の宮といふ 延喜式内 名神大

八幡宮 八幡村にありむかし八幡太郎義家奥の安倍貞任宗任征伐のとき此下向し給ひ此所に一宿し給ひし舊跡とて此神をあらたに勧請を

祭禮八月十五日

本社中央應神天皇 東神功皇后 西仲哀天皇 并にまつる

神楽殿 中門あり 左右に随身 二天と 惣門安置 末社 若宮 武内宿禰 山王 其外多し

本地堂 安置 弥陀三尊也

若宮八幡宮 上豊岡にあり八幡太郎御腰掛石の旧跡といふ 例祭三月十五日 此所より榛名山への道あり

烏川 高崎川ともいふ橋あり 河幅ひろし

一 板鼻をさりて八幡むら若塚村に浅間権現の宮あり豊岡村を経て見れば高崎川よりて遠くに向ふに見えわたせば日の原野の景色より出て樹々の間ほとど雲に峰れ松風にさそはれて山の

上野 高崎

美しき景をひとつに集たる遠望の盛景清らなるべし

倉賀野まで一里十九町 此所は松平右京亮侯居城の地にして城下の町長し凡三十町ばかり繁昌の地なり 此国都會の地にして月毎に六斎の市たつ 第一に上州絹紬煙草白図等をはじめ馬の鞍に用る其外種々の物を出して交易を賑ひいとにぎはし

あまたのおもしろく佐野むらにいたる

佐野舟橋舊蹟 佐野むらにありむかし烏川を舟橋にてわたせし舟木の観音 その構なりけるとぞ 榎の大樹今になほ本にあり 碑の塚を舊地とす

万葉　東路の佐野ゝ舟橋さのみやは 我中はれぞ年に逢める　古大弁

詞花　字勇にさのゝ舟橋よをとし まよわれの駒乃帰るらむを　後雅母

全集　きみ馴しけの中河瀬絶して 流まてる洞あるなり　源仲綱

後古　又月毎にねたる流さりて 夜ぬれをけるそ渡る佐野ゝ舟橋　能盛法師

新後拾　道さ見佐野ゝ舟越しよ絡けて 月にまきてる秋の旅人　藤原信実

夫木　煙立里はそれともみわかで 雲に霞む佐野の舟橋　為家

定家卿宮 佐野新田村にあり 勧請年歴詳ならず 例祭九月十五日

佐野源左衛門恒世旧蹟 佐野 咲屋村にあり 旧址に礎の中に塚あり

佐野恒世が事は世の人口に膾炙し 特に鉢木の謡曲に年久しき名高し 最明寺殿諸國行脚の事実録に見えては其ことの虚実を知らず謡曲作者にも見えてくる此旧跡も後人擬へ作るとみえたり

佐野長者屋敷 佐野渋谷西光寺の側にあり 方十間ばかり 佐野長者の号ある郷名にして其中に法村あり 所謂長者の号ある

上野 倉賀野

口士のまつのあるん 今の

新町まで一里半 此駅六七町ばかりにして民家相對しく巷坊あれ甚賑敖なん 此所より日光山の道厩橋の道あり 此宿をさりて新田村に飯林の道ありて岩鼻むらかんの川を烏川の末は ておちて両川落合ふてし中瀬村より足利の方あり 赤木山榛名山などの見える立石など多く新町の駅にいたる其上て此辺にあれ

定家社
佐野恒世蹟

佐野舟橋古蹟

国に桑を栽宅にも多く蚕害をいとふるゆゑ繭をとりこれを煮て絲を操功を積て繒に織る事は唐の玄宗の宮中にて養蚕を学しめ嬪をして女工の事を知らしむ我朝にも応神帝の御代に呉服織婦の二女来りて此技を教て宮中にも是を行ひし事あり

上州膳城素肌攻

勝頼其日の装束は唐衣といふ重代の腹巻に紫綾の羽織を着れ白糸織の毛靴をはいてゐられたる鉢巻は土屋惣蔵が勇卒腕又市弟一宮左大夫主人の矢面に立塞て追付敵と戦後に待退門後して突合けるは城兵六ひよ戦ひ便く城中に飄してひき退くを遁さじと追詰付入らんと早城戸を立合せて城の内に引入せる腕又市弟は乗込んて敵六人を相手にし獅子奮迅の怒をなし四方に当て戦ひ終に一宮左大夫衝堀門を押破て左大夫ともに本丸をせと又市に向つて捨て突合けるが左大夫ひしと思ひけん引退んとする所又市なにて此場を見捨く引返し我家にや成けん只我に任せよと其馳し先

られく心得たりと取て返し所に清見中根石黒城も馳来て名力を試せ捨て勝と思ひ残る土屋惣蔵一字に城門に乗込か若共が勝負に揃ひて二の門の内に直と乗入て土屋惣蔵一番乗と名乗なれども原隼人佐土屋に先を越られたりと押続て乗込ければ三人と渡合せ詰めぐる天晴ゆしくぞ見えにける駿州先方の日尾此左近も乗入たれども又市が働の不叙して日尾鄕ら其場に来らで見それは惣軍一度に乗込ければ城兵術を失ひ一人も残らで本丸に引入此時味方も息を休め先本丸に乗入んと残したりける勝頼公も乗入手で真田安房守も乗込て叢に本丸を乗水の手廓にありける人々は早に気を付ん唯堅固なる本丸を乗彼んと勇進む真田安房守これを考へて本丸の鹿を抜んと伺ひ寄て水の手を取て攻されば城兵大に狼狽して手負を失ふて散々見えにける委しきは武田勝頼軍記を併て見るべし

新町（上武）

本庄まで二里当駅六七町ばかり
民家相対して巷をなせり
金鑽明神祠 此駅の入口にあり此地の生土神なり
例祭九月廿九日
祭神 素盞烏尊 本社の左右に内外社 稲荷 扶桑 清瀧権現 熊野祠 住吉祠 天満宮
其外末社多し 本地堂 不動 薬師安んず 当所の新金鑽
大明神と書れ 当駅に
上野武蔵国境あり
此駅を立て神流川を渡りかの有名なる石神よりは
左の方に赤本山見ゆる富士峯に似たり此所立場に晩念寺
村なるべし小浜村よりこの所より世古への道あり左の森の中に
あるは金鑽の本社なり

本庄（武蔵）

深谷まで二里廿九丁此駅民居三百軒ばかり相対して
巷をなせり祇園の神事あり六月廿七日なり
当駅を出て傍示堂村に上州武州国界の標あり是より彼方を

此日に大市あり人数多群集して交易なすこと年々多し
それより堀田むら小山川常にかゝり橋あり岡の郷なる岡部六弥
太が住し旧跡あり
岡部原 岡部村より南の地続きにあり
岡部忠澄古跡 今は阿部摂津守殿の陣屋あり
岡部村にありむかし此地に城かまへしとぞ
普済寺 同上岡部村にあり 禅林 朝禅院末 曹洞
本尊釈迦三尊仏 忠澄墳 墓所の中にあり又丈墳の本像 堂内に安置
当寺はむかし岡部六弥太忠澄此郷を領地してかの禅院を
道徳を感じ殿閣を造立し本堂に十一面観音および一百
躰の観音を彫刻して安置なし抑忠澄は人皇廿一代敏達天皇の後
胤なり初め悪源太義平に属し平治元年十二月廿八日平重盛
と待賢門にて戦ひ大に武勇を振ひ寿永三年二月七日摂州
一谷の合戦に平忠度を討て首級を得る此故に勲功の賞として

忠度の采地五邑を忠澄に賜ふ忠澄武州秩父郡我野村に岩峰を穿ちて石室の宮を自像の石壁に彫刻し其傍に禅院を建て忠澄菴と號す又武州榛沢郡岡部に住して岡部を名乗る墳墓を築きて忠澄霊神と仰ぎ今に存す其外良従の古墳数くあり

於て宗祇法師行脚のとき此塚にむかひて懐旧の和歌を詠ぜん

なれをなに名のみ残れる古塚に主の露しく松風ぞ吹

宗祇法師

熊谷まで武里三十町此駅六七町許民家相對して巷をなせる餘は左右に散在ん

深谷観音堂 深谷にあり一本の柳ありと云

果園坊か碑あり其銘に曰

我佛法に入て風雅をたのしみ宗風雅を
もと法をもて佛法をきくとかれ

死ぬ事は知りて死ぬ日やしらぬもの也

果園坊

これは見て

法の花や柳の骨と成りにけり

祖風

熊谷

此駅より引ゆけば大木の杉むら多く道の幅も廣くして枡の川かうら
江府に近きを表して東方もしく新郡村に立場ありて茶店あり高
柳をもつて境杭新田新島村あり植木むら屋多く市原むら
より熊谷の駅に至る
鴻巣まで四里八町此駅三丁町民家相對して巷をなす餘は
左右にも町あり至つて繁昌の所なり是より秩父山へ三里半
此辺に畠山ありて畠山重忠の旧跡の城の跡あり江戸より畠山へ
十六里熊谷より本庄へ二里半南の方なり永井へ小二里半に
あり熊谷の在に別当実盛が住みし所なり是里半なり此宿
に赤城明神の庵ありて

蓮生山熊谷寺 京師知恩院末なり 熊谷の宿中にあり浄土宗
本尊阿弥陀如来 恵心僧都の作 多田満仲の息美女丸持念佛なり 東阿弥陀佛の其一なり 蓮生法師持念佛也

熊谷直實古跡

熊谷寺

蓮生法師本縁 暇擬本　同墓 村役の東の方畠の中にあり 壽永元年丁卯九月四日と識を

熊谷次郎直實は桓武天皇の後胤平盛方の子にして若冠の
ときに関東に赴き久下直光の聟となる成長に従ひ武勇つよき
をもつて都に待賢門の合戦に悪源太義平に属し十六騎武者の
随一と呼れ石橋山の合戦にも大将本陣の恩賞として右大将頼朝公より
菊水の紋付たる幕と旗竿を其外勲功の感状廿一通まで賜る
其後壽永三年甲辰二月七日摂州一谷の合戦に平家の大夫敦盛と
討て首を賜る吾子直家を戦場にて見失ひし時の思ひよりて敦盛
の父母の歎きを思ひやり無常のけふるをさとり且其首を帰しひ
其身弓馬の家に生れ後生の恐れも思ひしに兼より発心の思ひ立ん
その後建久三年の冬久下権守直光と縁合にて郷を武蔵国久下
熊谷の境と争論の後遂に誓文を挿ひ直に走湯山にて入道し年来
登て法然上人の御弟子となり二心なき念仏の行者と成し成小号其後

程なく元久二年故郷へ帰らんとせしより上人に願上られしかバ自画迎接の
曼陀羅并に御自作の御影を賜りぬ蓮生これを負ひ東武へ下りける
時不背西方の行者として彼初めを西に後にせざりけれバ馬にも逆さまに
乗りて只管念仏なされしぞ蓮生法師のほまれ

浄土に到の者とや沙汰を人々にむかひて後了せし日は
建永二年九月四日午刻往生すべき佛勅を蒙りし也村里の辻に札を
立させけるに果して其日に及んで不思議に音楽聞へ異香薫じて眼ま
のあたり往生し畢ぬ此称名を拝んとて遠近の老若群集をなし猶
麻のごとし紫雲ハ草庵の上に止事一時斗ありて西方さして去ぬ
これ上品往生の霊瑞と後世天正年中幡随意上人中興開起有
今の熊谷寺これなり

鎮守弥三左衛門稲荷ハ神作弘法大師の作なり直實不断信尊あり
て猛獣を討魔け陣頭に有りし時熊谷弥三左衛門と名乗て直實に
力を添致ひに勝利を得る特に一谷の合戦にも大手の先陣に向ひ篠を
刈たりしに彼人付添ひ加勢なぞ志けれバ終に不思議さに其姓名
を問ふ常に汝が信ずる所の稲荷明神なり名乗を救んとて熊谷弥三左衛門
と現じたるこそ忽其あとを隠しぬ即居城に宮舎を営みて神を
崇め今當山に鎮守し奉る

當山什寶

放光名號　和歌名號　斧瞽名號　弥陀三尊 名国光大師真筆

直實所持母衣旗名號 同真筆　理書 同真筆

阿弥陀佛 蓮生法師作 増上寺學誉大僧正寄附　裸形弥陀 傳来

迎接曼荼羅 蓮生所持　熊谷弥三左衛門稲荷 神作弘法大師作 本地十一面六臂

蓮生所持笈 内ニ弥陀三尊書 国光大師真筆　念珠　鐵杵　鉦 以上 蓮生持物

十五遍名號 蓮生筆　逆馬画 狩野清信筆 賛大納言實維卿筆

壽牌　火防名號　不断光佛名號 各 幡随意上人筆

氷川（ひかハ）の神社（ぢんじや）
武蔵国一宮（むさしのくにいちのミや）

御袈裟　珠數　幡隨意上人所持　子孫に置状　蓮生自筆

平經盛卿返状　訓閲集拔書　蓮生所持　運氣考并旗竿寸法

幕　石橋山の勲功によりて將軍頼朝公より拜領　騎鞍　蓮生所持

熊谷直實居城　戸田八町村に東行寺といふ孫寺あり これもしの城の址なり

東鑑云

治承六年六月五日甲辰。熊谷二郎直實者。匪勵朝夕恪勤之忠。去治承四年。追討佐竹冠者之時。殊施勲功。依令感其武勇給。武藏國舊領等。停止直光之押領。可領掌之由。被仰下。而直實此間在國。今日令參上。賜件下文云云

又云

下　武藏國大里郡熊谷次郎平直實所

定補所領事

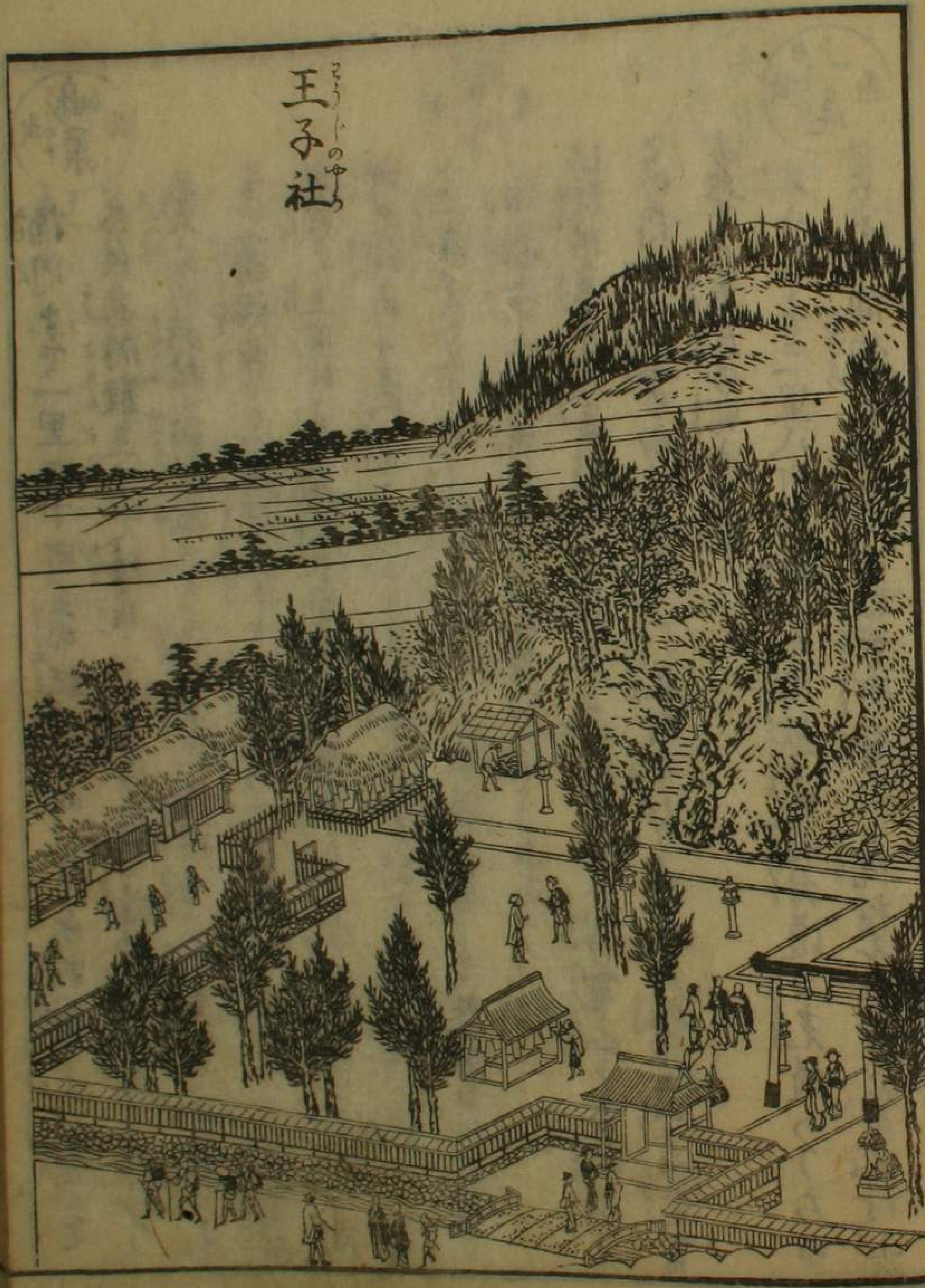
右件所。且先祖相傳也。而久下權守直光。押領事停止。以直實爲地頭之職畢。其故何者。佐汰毛四郎。常陸國奥郡。花園山楯篭。自鎌倉令責御時。其日。御合戰。直實勝萬人前懸一陣懸壊。一人當千顯高名。其勸賞件熊谷郷之地頭職成畢。子々孫々永代不可有他妨。故下百姓等宜承知敢不可違失

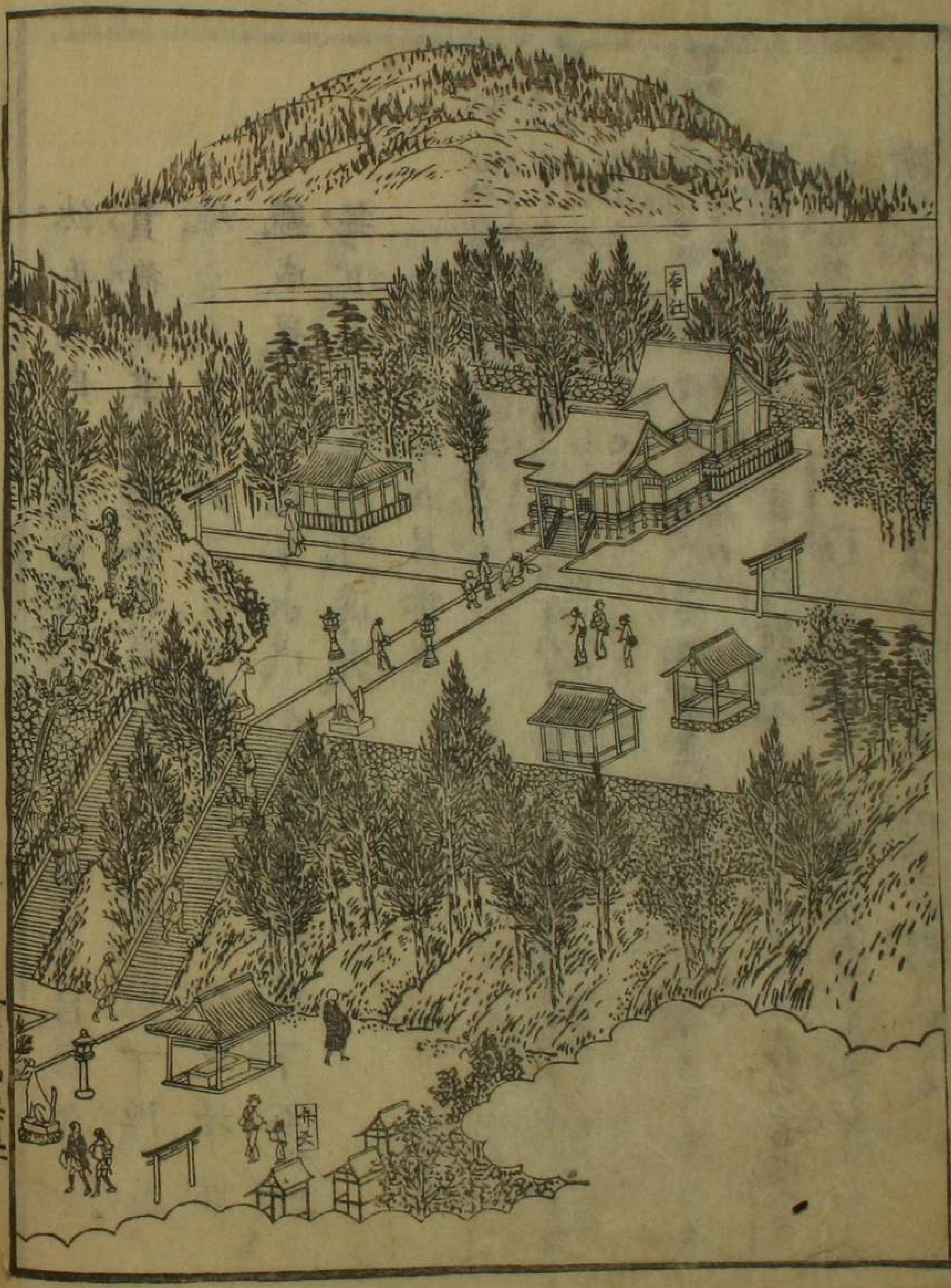
治承六年五月卅日

久下　むかし熊谷次郎が伯母聟久下次郎直光が住所なり　久下げる原より山王の森に續きあり これより土手にそひて左の方土手の下へ下りたる所をゆけば川見ゆる吹上の茶屋まで越さし足袋を

吹上　あまたあり熊谷の城への道なり一里餘なり

箕田　氷川社 紀吉藤なる念佛院に社あり 融大臣の後胤箕田源吾綱の古跡あり今八幡宮あり 熊谷の驛はなれて戸田八町村久下むらげる原より右の方に山王の祠なりこれより吹上むらへ立場ありて茶店あり並びむらなす 淺間峯見ゆる中井村箕田村を經て鴻巣の驛にいたる


王子社（わうじのやしろ）


本社

鴻巣　武蔵

桶川まで一里三十町　當驛三四町　民家相對して巷をなし甚賑敷として往居しける宿に葛味明神の社一跡あり
又大木の杉林大竹の林あり左の方に鉢林并に日光山への道有　又
こゝに勝願寺とて浄土宗十八檀林の一ヶ寺あり東むき三軒茶屋
など過て上田村に藥師堂あり又淺間宮立ありて鴻巣までならは天
神の祠右に多門寺ありそこら新田なる村を過て桶川の驛にいたる

桶川　武蔵

上尾まで三十町　當驛三町ばかり民居相對して巷をなして宿あり
浄念寺といふ寺あり又岩付への道こゝにあり
此驛を過て町屋村南むきれ右に窪村右に雷電山とて林あり
この内に雷電の社一跡あり門前村をむかふ過て畑村に観音堂有
これより上尾の驛にいたる

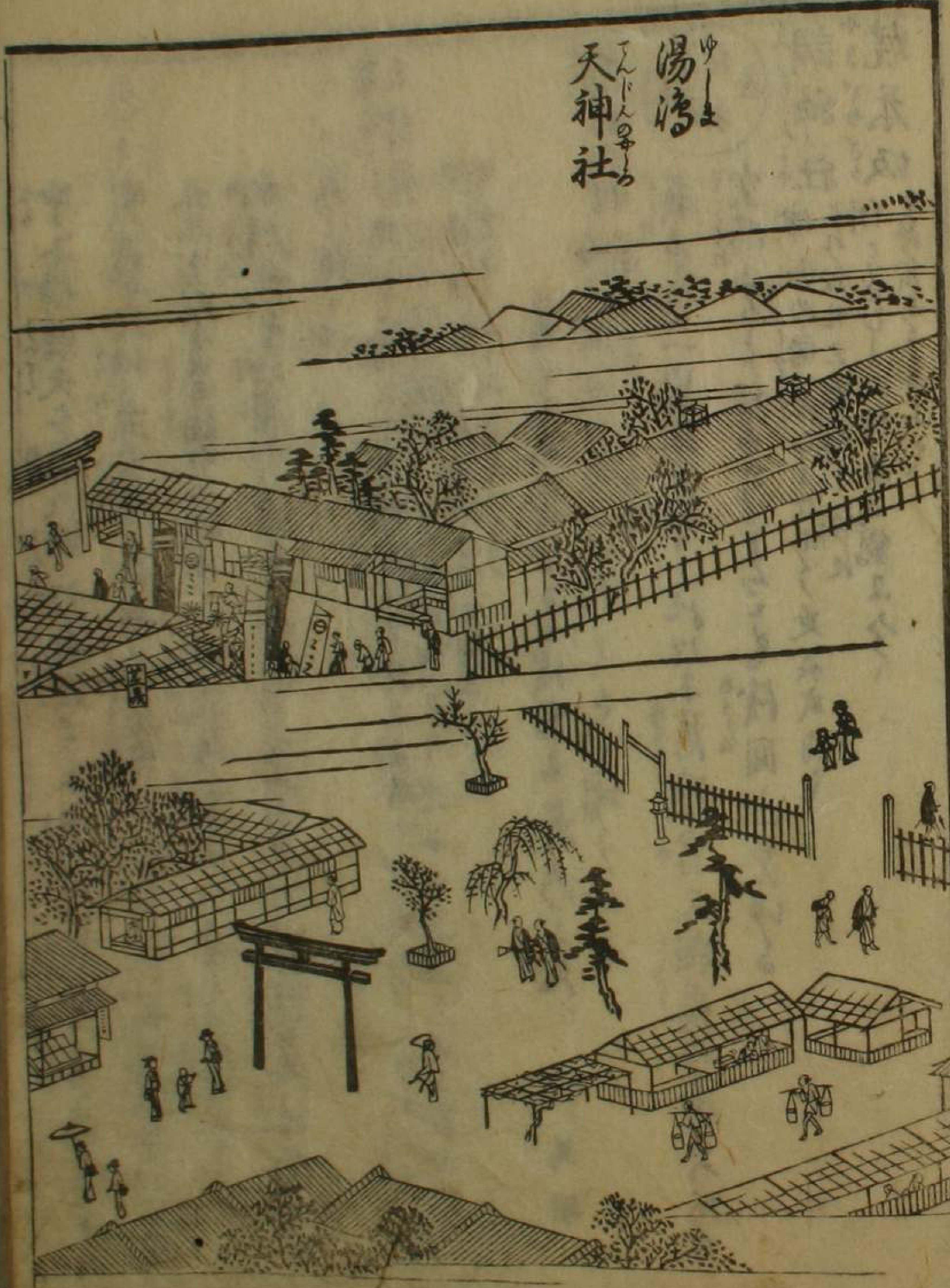
上尾　武蔵

大宮まで二里八町　此驛より川越道岩付道日光道あり左の
方に淺間祠これを過て桶谷町過て梶村を過て賀茂村に

賀茂祠あり吉野村小草村土手町を過て大宮の驛にいたる

大宮　武蔵

浦和まで一里十町　宿の入口に
東光寺とて禪刹あり
氷川神社　大宮の驛にあり　延喜式云足立郡氷川神社名神大月次新嘗　武蔵國一宮と称す
祭神　素盞烏尊　此所の生土神なり
女躰社　本社の左にあり　稲田姫を祭る
五山祇社　大山祇　中山祇　麓山祇　正勝山祇
金鑽社　手摩乳　足摩乳の命を祭る　本社の傍にあり
氷川王子社　神池の傍にあり　大己貴命を祭る
末社　愛宕社　住吉社　布留社　神明宮
神楽殿　池の东にあり　弁天堂　池の中にあり
不動堂　同所にあり
夫當社は當國の一之宮にして社頭廣く神前の池に入る反橋有


湯嶋天神社
ゆしま
てんじんのやしろ

末社
本社
戸隠

中山辨財天を安んじ神社森然として並樹の松原一両丁許まで十八町其中に神主岩井角井両家住し社領三百石例祭は六月十五日なり当国の大社にして倩人陰晴を嫌はず参詣絶る事なし

氷川社 是江府よりは遠くといへどもみな当社を勧請の御神なりとぞ

大宮原 鴻の巣より

大宮原 大宮より野原の間三十町許あり中程より左の方に茶店あり是より遠く西の方山見ゆる富士浅間甲斐武蔵下野日光上州妙義香保など遥かに見ゆる

夏も霧富士は浅間は鼻の先　馬明

針ヶ谷村 右の方に落合村あり此所よりも其晴るゝ時は富士峯見ゆる也

武 浦和 驛

調神社 浦和の南の岸にあり延喜式内也是を俗に廿三夜祠と称し

焼米坂 是より焼米を製して商ふ

蕨まで一里半ひだりは月読宮又稲荷の両社なり

空晴るゝと絶えてよりも浅間山見ゆる

中丸茶や麻きく人に見出　半残

浦和城を遠く岸むかふと色白き村続き辻村過ぎて忍の土手

神明の中に流ありわらびは村城色く蕨の駅に入る

板橋まで二里八町 此驛民居六七町あり繁昌し

戸田川へ二十四町あり

名を聞んだわらびさし出た里女の郎　高根 秀暁

此驛をすぎて行くと元の板橋の辺の茶城より戸田村に至る此川端に

子安の稲荷道あり

戸田川 下は荒川と称し川上は入間川にて

此河を遠くして志村よりて流るを下れば坂あり下り口に茶店有

又地蔵坂をこえて小豆沢村清水村に至る蓮沼むらより

稲荷の前に流ありて又小坂城をこえて縁切坂より板橋の

驛に入る

江戸
市中の
扇店ハ
京
御影堂の
名代
御影堂
影堂

千里
日本
一笑
影堂

武蔵 板橋

江戸日本橋まで二里此駅は中仙道の東程にして町十町許あり
所々に花魁店茶屋ならび紅粉を粧ひて花簪さし待ちぬる
美艶をかざる格子のうちゆかしく旅客の歩をとゞむる事あまたあれば
知と真するも多し

拾遺
思ひきやしらぬ世にたえぬ住む川上ゝ流を玉章　頼政

平塚明神社 板橋の巽の方平塚山にあり 別当安楽院城官寺と号す
祭神 八幡太郎義家 賀茂次郎義綱 新羅三郎義光の三霊を祭りて三社といふ
鎧塚 本社の後にあり 義家の鎧を収められし塚なりとぞ
むかし御遠征の砌城官といふ者接待ありけり城官が教軍に御宴宮家に進ぜし
あるとき御平愈ありしかば城官に社を御寄附
後おく御平愈あり城官に所領を賜ふ故に城官当社を建立し神補にまつる
城官寺

王子社 王子村にあり 別当東光院金輪寺といふ
祭神 熊野三所神

稲荷社 同村にあり 金剛寺の支配なり
寛永十一年 宮家より御造立 林道春其記を書る 例祭七月
十三日 寺中十二坊踊を出す

飛鳥山 弥生の頃は雲と見え雪と散る花に袂も袖さへぞ
白ひに家路忘るゝも多かりし

無風花襲
風なくて動かぬ雲と見ゆるは花の盛なるらん　錦嶋

冨士権現 駒込にあり 当社はむかし本郷にあり 寛永年中此地に
遷さる 霊泉院兼帯所也

神明社 駒込本村にあり 別当松光山大泉院
文治五年源頼朝公の建立にして其後荒廃し小綱のくだしと
慶安年中堀氏の族再興しける

田畑八幡宮 駒込にあり 別当白龍山東覚寺
此宮も駒込神明宮と同時に頼朝の勧請也

根津社 谷中にあり 別当昌泉院 神主伊吹氏
祭神 素盞烏尊 大己貴命 蛭子命 三前彩象

神田社（かんだのやしろ）
山王

当社ハ今の社より東の方縁結本樹の坂上ニあり文明
年中太田道灌の霊剣ニ宝永三年のれ寛家より勅ニ
社壇御造立ありて其霊の極月六日ニ
御遷宮ありけるなり　祭礼九月廿一日

湯島天満宮　湯島にあり　別当北野山喜見院
祭神菅公　祭日二月十日　文明十年太田道灌草創ニ　十月十日なり
戸隠明神　境内にあり当社地主神なり
笹塚稲荷社　社頭ニあり

妻恋稲荷社　湯島にあり　神主村本氏
祭神日本武尊　橘姫　倉稲魂神　三座を祀る
日本武尊東征し給ふとき東海に臨みて妻恋し玉ひしより此名を得たり

神田社　湯島にあり　神主芝崎氏
祭神大己貴命　往古ハ神田とて太神宮へ初穂を神納ス
所なる田地ありしかバ此社を豊島郡芝崎
村ニあり大己貴命ハ五穀の神なるゆへこれを祀るとぞ世ニ芝崎
将門の霊を祀るといふハ延文のころより始まりしとぞ芝崎
もしくハ今の神田橋辺なる酒井家の屋舗の地ニ当宮の
旧地なり今も祭礼の時ハ神輿志たしかの所ニ至りて

幣帛ありとぞ元和二年当所に遷座あり祭礼隔年九月
十五日祭礼の日神輿御旅ありて四座の役者より出勤れ
牛頭天王三前　神なり当社の地主
住吉明神　摂州住吉より勧請しての佃島の漁師の催る
人丸明神　神像を安ず
末社　恵比須　神明社　大黒　諏方　八幡　稲荷　山王　疱瘡神

聖堂　湯島昌平坂の上にあり　祠堂厳しく林家之を守る
文宣王并十哲を祀る
釈奠二月八月の内上丁日に行ふ　仰高門　入徳門　杏壇　何れも家あり
抑本朝釈奠の始ハ文武天皇大宝元年二月丁巳日はじめて
行ハせ給ふ其後光仁天皇宝亀三年右大臣吉備公釈奠の具
改定して孔典器物等数多に闕色し給ふ事続日本紀に見えたり
本朝釈奠の式ハ享日未明五刻より初社令其属及び廟司を率ゐ
て先聖の神座ハ廟室の内中楹の間に設く先師顔子を首座

日本橋

中し閔子騫より以下冉有までを併て四座とし文宣王の東方
設て西を上座とし又季路より已下子夏までの五座を文宣王の
西に設て東を上座とし併て十一座何れも南に向ふ二座其外魚
秋菜など六衛府よりこれを進む陳設の品々執事の員数何れも延
喜式に詳なり

板橋をこえて左に川越道あり右に雑司谷護国寺四谷などの道
あり直に行ば平尾村を過て巣鴨町に立場の茶店ありたり
六地蔵堂あり是より駒込の町よりゆきけいせん窪を過て竹町の左
の方に白山権現の社あり是を離し追分に到る左に岩淵日光道右
に本郷筋にて是より日本橋まで一里よ近し森川宿を通て本郷
六町あり又町目に神田の社あり神田広小路左の方に湯島
天神の中ら坂あり右の方に聖堂筋違橋の御見附をへて
十町余を過て日本橋にいたる

江戸 日本橋

此邊の旅宿にいたり一両日艤してくさ/\のゆく船のかなて
あまたくの旅路を過て下総の本国にて所々を参拝して神像乃
庫し後香取の神社息栖の神を詣し鹿島に至て船にて下りて
是て舟三日逗留して神社名所を見くり又船にのりて延方にいたる
板久牛堀を過て麻生を経て濱並に宿りて玉造を過て小川府中
片野を過て小畑より十二塚を登りて筑波山に詣しまつりてゆく
の旅路を経て日光山にいたり中禅寺二荒山に登りてかへりきたる
此の書に記す

新古
武蔵野や行くも秋の果ぞなきいかなる風のすゑに吹らん　通光

同
行末は空もひとつの武蔵野に草の原より出る月影　摂政太政大臣

新後拾
如此程なくて見えて白雲の果にすむ武蔵野の原　藤原長秀

木曾路名所圖會巻之四終

本草四、六十五號

白井氏李泉亭藏書記

樂天堂佐藤才[illegible]

[illegible]